子おし隔てられむはいかゞ候ふべき。只病とて五著の奴原に、使をもて媚び諂ひ欺くにしくべからず。討手來らば力なし。其の後一戰を遂げて五著を打ち破るべし。罪なくて討たんとする惡逆の人天の咎なからんやと口々にいへども、孝隆各〻存ずる旨は誠にことわりなれども、今病といはんに實とは聞き入れじ。必ず主君に叛くと人に誹られん事士の志に非じ。君に深く思ひ入りたる忠の空しくならんは、運のきはめなれば力なし。われ一人誅せられたりともいかにせん。此の姫路をだに取られずば、天下の安危歳月を經ずして定まるべしとて、さゞまる色の見えざれば、宗圓家の恥を思ひて身をすてむと思ひ定むる事士の志なり。とく五著にゆきて事かなはずば自殺せよ。後の事は心安く思ひ候へ。君の志たがふともわれ叛くべからずといひしかば、孝隆打ちわらひ、さらばとて座を立てば、人々只今思し召されての仰は遺言にあらずや。もし五著にて難をのがれ給はずば、其の時人々五著の城を枕にせんと誓ひけり。宗圓官兵衛は官兵衛の志をせよ。人々は人々の志をせよと下知せられしかば、孝隆五著に赴きけり。宗圓見送り、子ながらも恥かしき事なり。先だつべき親の留まりて子に死れといふこそ口惜しけれ。されども君恩淺からざる人の存ずる處なり。今譏言を信ぜらるゝこそ悲しけれ。孝隆をやらずして引きこもり、謀叛して命はをしき物ぞと敎ふるは父の道に非ず。仇となりて身を殺す

は恥をしる道なりけりとて、さめざめと泣きたりけるが、さぞ五著にてたばかりて見んに、今姫路に弓を引く設なせそ。小酒もりして時々舞ひ謠ひて日をおくれといひきとぞ。孝隆は五著に行きて、心おくべき人のもとに使して求め來れる肴ありとて饗し、しめやかに語りて打ちとけたる體なれば、いかにつくろふとも心の外にあらはれぬ事はあらじなどいひあへり。又此れを疑ひて黑田父子は謀たくましき者にて、よき士あまた有り。城にこもる用意せん間に、官兵衛を以て欺くべきも計りがたしとて姫路の樣を聞くに、宗圓金剛に舞まはせて打ちとけたる體なれば、さては別の事もあらじといへり。此の時攝州荒木攝津守村重は毛利に屬し、信長と戰ひ利あらずして有岡の城にひきこもる。此の由小寺聞きて孝隆をよびて、われ毛利にくみすべきとは、內々荒木といひかはしたる故なり。今毛利家にたよらん事は過ちなりと覺ゆるぞ。されども此のまゝにて手ぎれをせんに、裂裏者といはれんも口をしければ、とく有岡にゆいて荒木を諫めて、もし聞き入れば秀吉に謀りて、信長と荒木和平をとり行ふべし。攝州信長にしたがはば、われも眞に心をひるがへして信長に從ふべしといへば、孝隆聞きて信長と荒木と和平は思ひよりも候はず。荒木度々信長に背きたれば、いかで其の言を信ぜらるべき。參りたりともいたづら事ならん。然れども辭し申せば勇なきに似たりとて有岡に赴く。路姫路に立ち

よりて、父子對面し、有岡に至らば必ず首をはねべきか、おさへて囚とするか。二つの中に過ぎ候ふまじ。五著に死なんより有岡にて死に候へば、信長も聞き又世のほまれともなり候ふべしと、思ひ切つたる色を宗圓見て涙にむせび、しばし物をもいはざりしが、良有りて誠に困厄の至極なれども、名にかへて身をすつるは、義を思ふ故なりとて見送りしかば、孝隆有岡に赴きたり。小寺兼れて村重に密に毛利に一味すべきに、黒田父子人質の松千代を信長に出だし置きたれば、かの父子は織田に内通の志ありと告げしらせつれば、有岡の本丸によび入れ、生ごりて牢におしこみけり。五著に此の由聞えしかば小寺いつはりて齒がみをなし、荒木が狼籍の次第遺恨深し。然れども此の上は信長に一味のこゝろを易へて毛利に與みし、官兵衛を引きとる謀や有るべきといはせしかば、宗圓怒りて官兵衛生けごりに成りしかば是非の論なし。年老いたる身の子を失ひし事は誠に力なき次第なり。然るに官兵衛をすくはん事いはれなきに非れども、先づ松千代を信長に出だしし事は、君も又臣父子と相計れる處にて候ふに、今度官兵衛を有岡にて捕へたるは、荒木が横さまのふふまひなり。相はかれる處の人じちを棄てて、おしとめたる者を助くべきは逆ならずや。只順道に隨ひて天の冥見を待つにしかず。われわかき時より度々の軍に臨み、小寺の家の危難を救ひ候ふに、今齡かたぶき賴み切つたる長子を

すて候ふ事は、口をしく候へども、首をくだかるるとも、毛利に一味せよとの仰なば得承らじとて、刀を抽き誓つてければ、使も言なくて歸りけり。宗圓が士ども五著を攻め破らんといへども用ゐず。村重心あらばいたはるべし。もし五著を攻めなば村重も官兵衛を殺害すべし。しらぬ樣にてあれよ。かくあらんと思ひて、官兵衛が女房をば潛に此の比引きとり置きたりとて驚かず。村重は小寺にたのまれて孝隆を生けごりたれども、己がかたきにも非ればいたはり置きけり。かくて信長有岡を攻むるに及びて、毛利家の後卷もせざれば、城落ちたりけり。孝隆は牢の中にあきれて有りける處に、栗山備後善助時々有岡にゆきてしのびて商家をかたらひ、牢の後の沼より、姫路の事ども語りし事度度にて、案内をしりたれば、牢に走り行きて見れば番人も落ちうせたり。此れはと驚き且つ悦びて、善助すて置きたる斧にて鎖を破り、引きたてけれども、三年居かゞみ其の上に濕瘡を病みて起つ事あたはず。かたへなる牢中の人をたのみ、かきおはせて城を出て、寄手の陣にゆき、さて姫路に歸る事を得たり。秀吉播州に攻め入るに及びて、小寺は但馬におち行き、黒田父子危難を脱るゝ事を得て、孝隆に宍粟郡を賜はり、姫路を秀吉の城とす。後に如水と稱して智謀たくましく、秀吉の功臣第一と聞えしはこの孝隆なり。

一三五　井口兄弟武勇の事

黒田孝隆播州にて秀吉の命を承け、長の坪といふ城を攻め落し、井口猪之介・三宅藤十郎に其の城を預け、孝隆は秀吉の先陣たる處に、其の城より逃げ落ちたる者ども、一族を催し其の夜攻めよせたり。井口・三宅人も少く攻め破りて普請も未だせざれば守り難し。殿未だ遠くはゆかせ給はまじ。切りぬけてまゐり、後卷の事申すべしと云ひ合はせ、三宅は百二十人許にて搦手に有りしが、人數を殘し二十人許を連れ圍を出づ。敵利を得て攻め入りたり。井口は大手にて防ぎ戰ひしが、翌朝辰の刻後卷の旗先見ゆる比、薙刀にて片股をなぎ落され、石垣にたより居たれども敵恐れて近付かず、最後に大音あげ此の城の大將井口猪之介ぞ、首とれとて自害しけり。藤十郎は後三宅若狭とて武名あり。猪之介に三人の弟あり。六大夫・甚十郎・與一之助といふ。六大夫は播州北條の構を守りく討死しけり。ある時孝隆の士卑ありて討手を向けらるゝに、却りて討手を切つて兄弟三人町に出て、大なる屋に取りこもりたり。甚十郎見て參らんといへども孝隆ゆるされざりしに、再三に及びければさらばとてゆるされたり。甚十郎其處にゆくと、忽ち門の潜戸を引き放し、楯にとりて飛びこみ、戸を以て二人を

打ち伏せ、一人は切り殺し、打ち倒したる二人も切つて、首三つとりて馬に乘り、二町許歸る處に、卑科人の從者主人の首を見て、鉛にて甚十郎が馬上を目がけ飛びかゝりて突く。つかれながら其の者を切つてすてたれども、痛手にて馬より落ち、少時ありて蘇生したるを戸板にのせ來る。孝隆膝を枕にさせ、手は如何と問はるゝに、如此に候ふと一言いひて終れり。兄弟三人皆わが爲に死したる事、報ゆるに詞なしとて、孝隆其の父與二右衛門が宅に、自ら往きて弔はれ、與一之助七八歳なるを呼び出ださる。既に九つに成りける比、三人の兄は勇氣ゆゝしき者なりけれども、人の生質は計り難ければ試みにと思ひて、磔を見つるやと問はるゝに見ずと答ふ。今夜は月明なり。それの所の磔木の下にゆき、しるしを立てて歸らんやといはるゝに、承り候ふとて、自ら御幣を切り竹につけてあたへらるゝを與一持ち行きて立てんとするに、磔木動くを見て、死にきらぬか留めをさしてとらせんとて、木にのぼるに、驚きて磔木より飛び下り逃ぐるを、與一さてはにくき次第なり近すまじと追ひかくる、せん方なく宮のありし内へ入り戸をたつれば、いつまで待ちても出づるをきらん物をと呼ばはる。さまざまにすかし名をいへども歸らざれば、殿の仰にておどしの爲に來たり。きせさせ給ふ帷子の片袖を證據にとりて、ゆるされよといふによりて歸りぬ。朝鮮にて竹も木もなき廣野に一筋の道窪くて切

通しに似て、其の向ふ處大山の麓にて曲尺の如し。大穴を穿ち射手を籠め置きて、行きかるゝ日本人あまた射殺され屍相重なれり。山かげの敵多少をしらざればすゝむ者なし。井口が從者山崎喜兵衛見て參らん。馬を扣へて待たれ候へといひすて走りこむ。井口も馬より下りて走り入り、山崎先づ射手三人を生どり、其の首を待つて大音あげて名のりたり。井口攻め入り追つちらす。井口其の時は兵助といひけり。此の賞美に朱柄の鎗をゆるされ候へと申す。卒爾にはゆるしがたし。一日に首七つとりてこそ、朱柄はゆるさるれと申し傳へて候ふと人々申しける故、事延びにけるが、其の後井口一日に首七つ山崎も首六つとりしかば、朱柄を兵助にゆるされたり。晩年に村田出羽吉次と稱しけり。

一三六　吉田六之介首供養の事

別所家にて首供養したる人有りと孝隆聞きて、秦桐若首三十一とりたるに、惜しむべきは死したりき。吉田六之介正利供養すべしといはれしに、正利首數二十七とりて候ふとて辭したりけり。孝隆小氣なる男かな。今年三十一歳なり。此の後首とるまじとや。先づ供養して後に其の數を合はせよとて米百石あたへ、供養して播州青山の南に塚を築きたり。後所々の合戰朝鮮の軍までにとりたる首五十に及べり。後壹岐といふ。

一三七　生田木屋之介武功の事

天正五年黑田孝隆播州佐用の城を攻むる時、生田木屋之介夜中に忍びて城際に近づきより、懐中の小鋸をもて塀柱の根を切り目じるしをして、翌日城攻にかの柱に鈎縄を付けて引き倒し、先がけして城に入りけり。木屋之介もと隅田小介といふ。日向國隅田刑部少輔が嫡子なり。十六歳の時朋輩を討つて出奔し、播州に行きて孝隆の士井上九郎右衛門を賴みけるに、留め置き未だ對面せざる處に、其の夜隣家に人を殺し取り籠りたる者あり。夫れをからめ出だすに付、即時に孝隆に申して、それより率公しけり。播州生田の城にて高名あり。これによりて生田木屋之介と姓名をたまはる。是れその高名をながく顯さん爲とかや。

一三八　備前國福岡城合戰福井小次郎歌を遺して討死の事

文明十五年十二月十三日備前福岡の戰に、

〔備前はもと赤松氏世々領せしに、嘉吉元年赤松滿祐滅亡の後、備前をば赤松相摸守敬之に賜はり敬之が代官小鴨大和守備前に有り。應仁の亂の後、備前津高郡金川村玉松の城主松田左近將監元成を、細川勝元相かたらひしかば、元成兵をあつめ小鴨を攻めんとするにより、赤松が家人ちりぢりになりし者共元成にくみし、小鴨を攻めおとしぬ。赤松兵部少輔政則元成を賞して、伊福の郷に置きぬ。山名宗全細川勝元共に病死の後、京都は少ししづかなれども諸國は彌〻大に亂れ、松田が一族ども備前西郡の中あまた押領す。政則は將軍家より功を賞せられ、播磨・備前・美作を返し賜りぬ。山名右衛門督政豐これを怒り、文明十一年九月京都を出で但馬の國に馳せ下る。かかれば政則も播磨に馳せつけて、此のついでに備前の松田が恣に攻めとりたる所を治めたゞさんとせり。元成此の由を聞き、兵粮用意の爲にしたる所は返すべけれども、伊福の郷に於ては軍功によりて賜はりたる處なれば返すべからず。これは事に託してわれを打〻亡さんの謀ならんとて金川に城を構ふ。此の城は麓には大川流れ峰高く、四方嶮にて要害よき地なり。されども後卷の手だてを謀り、備後國山名俊豐に告げて備前を切りとりまゐらすべしといひければ、俊豐是れを悦べり。政則備前に赴き、松田がおして己が地にしたる所々をとり返しければ、文明十五年九

月山名も備後の尾道を出で同國國分寺に著き、三千餘をかり催し、十一月七日備前の國に打ち入りしかば、松田が一族相あつまり、邑久郡福岡の城の西北の山に陣どりたり。福岡の城は東西に大川流れ、中に島山あるを城に據りて政則の守護代浦上喜三郎則國を始として、二千餘人たて籠り、川上の瀨は長船右京亮等に野伏を添へて陣どりたり。十一月廿一日おしよせて合戰あり。浦上が家人に楢村與三兵衛・同又四郎とて兄弟あり。是れより前に元成に奉公しける因ありしかば、密にかたらひて、十一月廿三日夜半風はげしき便に、陣屋に火をかけたり。寄手内通に力を得てやがて攻めよせたりしに、城中きびしう支へ戰ひて追つ返す。其の後事あらはれて楢村兄弟をからめとり、これを誅しぬ。寄手其の後相はかりて、十二月十三日に又富岡といふ小山に兵を出だす。城よりも打つて出で散々に相戰ふ。寄手も城兵も討たるゝ者多し。〕

福井小次郎はもと京都の人なりしが、四歳の比、父源左衛門當國の在番の時連れ下り、城中にありしが、ことし廿一歳なるが、其の日の軍に父子の間を敵味方におし隔てられ、父は城中に入りたると思ひ、走り歸りて尋ぬるに見得ざれば、又城外に打ち出で寄手に向ひて、福井小次郎と名乘り縱さま横さまに切つて廻りしが、あまりに戰ひ疲れしを、家人肩にかけて城中に引き入れしに、淺手深手二十

六所被りければ終に死にたり。父城に歸りて小次郎が手箱を開きて見るに、あまた書き置きたる其の中に、母の方へ幼少より別れまゐらせて、此のまゝに討死せば御なげき有らんこそ心にかゝり候へ。しばし此の世に殘り給ふとも、終には逢ひ奉るべきにて候へば、思しめしわけてなぐさませ候へと、まごまと書きて、おくに、

生れこし親子の契りいかなれば同じ世にだに隔てはつらむ。

と書きたりしによりて、思ひ定めたる討死なりと人皆をしみけるとぞ。

一三九　再福岡合戰藥師寺、額田、片岡三士討死の事

文明十六年正月六日又福岡にて軍あり。城兵敗北する處に藥師寺四郎左衛門薙刀をとり返し合せ、爰にて討死するよとて支へ戰ふ。同彌四郎等四郎左衛門を討たせじととつて返し、津坂の山の麓より城際まで、僅の兵にて多勢を防ぐ。拂ひ退にしけり。寄手の中に福屋九郎右衛門とて剛の者、鍬形打ちたる兜を著、透間もなく四郎左衛門に切つてかゝりしに、四郎左衛門が家の士返し合はせて、福屋は討たれぬ。されども寄手彌〻おひつめしかば、藥師寺次郎左衛門・額田十郎左衛門・片岡孫左衛門三

人、引き返し枕をならべて切死にしたりけり。是れは三人必死を約束したる故とぞ。是れより前三人物がたりせし時、次郎左衛門いひけるは、此の度の軍必ず味方打ちまくべし。松田はもとより當國の者なり。後卷を味方よりまうせども、播州の加勢も來らず。政則眞弓峠の軍に打ちまけ、姫路に引き退ききと聞ゆれば、味方は力を失ひぬ。さらばとても打死すべき身にて、人の後にながらへてあらんも本意にあらず。重れて軍あらば必ず討死せんと語りければ、兩人聞きて、我々も同じく存ずる事ぞと、互に同じ處に討死せんと約束しけるが、今日次郎左衛門打ち出づるとて、唯今敵の手に渡るべき首なり。最後の對面すべしとて、鏡に向つてにつこと笑ひて出でしとぞ。額田は岡本筑後守に向ひて、子にて候ふ又三郎は一子なれば、とりわけて不便に存ずるなり。われと一所にあらば必死をのがるべからず。宜しく計らひたまはれといひければ、心得たりとて引きわかちしかば、けふ討死をせざりきとなり。片岡はわが家來に向ひて、わが首必ず敵にとらるべし。これをしるしに死骸を尋れよとて、小よりをもて左の二の腕を二重に結ばせたりしが、果して是れをしるしに死骸を求め得たりとかや。

巻の六

一四〇　山崎合戰の時堀秀政寶寺の山をみる事

山崎合戰の時、堀久太郎秀政の士の子何がしといへる者、明智がもとに率公して有りしが、光秀夜のいまだ明けざる内に、寶寺の山に兵をおしあぐべしと謀りしを、父のもとに告げやりて、おもひもよらず敵味方となり、明日は一戰に及ばん事を歎きける。其の書狀を、則ち秀政に見せたりければ、秀政夜半に寶寺の山におし上り、陣し待ちかけたりけるをいかで知るべき。夜明がたに明智が先手押し寄せたる處を、秀政山上より鐵炮を打ちかけ不意に切つてかゝり、追ひ崩して一戰に利を得たり。

一四一　森寺政右衛門武名の事

山崎の合戰に、明智が先陣と護國公の先陣と戰をいどむ。時に侍大將森寺政右衛門忠勝眞先かけて敵を追ひたつる。森寺が馬印檜木笠なりしを明智が者共見て、けふ檜木笠の馬じるし持たせたる大剛の者下知せし有さま目をおどろかし候ふ。姓名を承はらばやと度々呼ばはりけるを、秀吉聞いてけふの軍森寺が一人の武名をあげきとて、桐の紋付きたるはをりをあたへられけり。

一四二　則武三大夫功名の事

山崎の軍に堀尾帶刀吉晴の士、則武三大夫首を取りて吉晴の前に來る。吉晴おもひしよりも出かしたりと詞をかけられしかば、則武怒りて首を提げてすゝみより、かゝる時は大將も目のくらくなる物に候ふ。則武三大夫が取つたる首よく御覽候へと罵る。吉晴もにくき奴哉といふまゝに刀抽いて斬られしに兜の星を削りたり。則武眞一文字に敵の中にかけ入りて首を取りて歸る、吉晴は必ず則武は討死せんと悔みおもはれし處に、則武來りければ大に悅んで、汝をさきにほめたる詞賞する餘りにおもひしよりもといへるは、剛の者にいふべき詞にあらず。わが過にてこそあれ。汝が二度の先がけ大きにすぐれしよと感ぜられけり。

一四三　瀧川一益厩橋を退く事

天正十年瀧川左近將監一益は信長の命により、關東の管領として、諸將の質をとり、上野の厩橋に

ありける處に、六月七日信長弑せらるゝの變を聞き、老臣ども事をかくさんといへども、一益、惡事千里といふ諺あり秘すること能はじとて、上州嶺の城主小幡上總介信眞・鷹巣の城主鷹巣三河守信尙・金山の城主由良信濃守國繁・館林の城主長尾但馬守顯長・小股の城主澁川相摸守義勝・倉賀野の城主倉賀野淡路守秀景・白倉の城主白倉左衛門佐・藤岡の城主内藤大和守秋宣・安中の城主安中越前守・高山の城主高山遠江守重光・五閑の城主五閑刑部・小泉の城主富岡六郎四郎・石倉の城主長根縫殿介・大戸の城主大戸民部直光・木部の城主木部宮内貞利・和田の城主和田右兵衛大夫信業・那波の城主那波對馬守宗元・武州忍の城主成田下總守・深谷の城主深谷左兵衛憲盛・松山の城主上田又次郎政朝等の諸將を招き、信長の變をつげ各〻の人質を歸し、いそぎ上京して弔軍すべき旨をかたる。諸將大に感じ、此の一大事を告げて人質を歸されんと候ふに、いかでか二心候ふべき。人質を其のまゝ置きて仰に從ふべしといへば、一益諸將の義心謝するに詞も候はず。北條の表裏定めて一益を討ち取りて上野をおし取るべきならむ。此方より打ち向ひ一軍せんものをとて、城には同姓の彦次郎忠往を守に置き、一萬許の兵を率ゐて神奈川に押し出だす。

〔一說に、北條家より人質を渡し、はやく城を出でよさらずば一戰すべしと云ひ送る。一益吾れ信長の命を受け、關東の管領たり。今危に臨んで何ぞ北條が下知に付くべきかとて、兵を出だせりともいへり。〕

北條氏直果して小田原より兵を出だし、武州兒玉郡本庄に著きて、先陣北條安房守氏邦神奈川におし寄す。一益は川を後にして相戰ふ。大敵支へがたく討たるゝ者多し。一益厩橋に歸り、其の日討死せし人々の姓名を過去帳に書きて、黃金を添へて寺に送りて供發し、諸將をあつめ暇乞ひとて酒宴し、一益鼓をうち兵の交はり賴ある中のとうたひければ、倉賀野淡路守なごり今はと鳴くとりとはやし、終夜酌み醉ひて太刀刀取り出だし、上州の諸將に引出物にし、懇に暇を乞ひて六月二十日厩橋を打ち出で、各〻人質を歸しけれども、皆請け取らずして驛馬等の事沙汰し、是れを送りて笛吹嶺に至る時、國人の人質悉く歸し、木曾路より歸京す。瀧川彦次郎は一益が長男三九郎二男八丸を伴ひ木曾路にかゝる時、一揆起り八丸を奪ひとられしを、一益が士古市九兵衛一揆を追ひ拂ひ、八丸を奪ひとりて一益と同じく長島に歸る。

〔一說、神奈川の合戰に八丸生け捕られしを、古市追ひ討ちて其の敵を切りふせ、八丸を奪ひ取つて連れ歸るといへり。また筌岡平右衛門・津田治右衛門ふみ留まりて討死しける。其の間に一益

兵を納めて廐橋に歸るといへり。笹岡平右衛門は一益の馬とりより取りたてられ、氏は笹岡彦次郎是れをあたふ。武功度々に及びて士大將となり、武者奉行たり。又酒宴は倉賀野にての事ともいへり。」

關東にて一益廐橋を引きはらひたるふるまひ殊に賞美しけりとぞ。

一四四　光秀愛宕山にて連歌の事

天正十年五月廿八日光秀愛宕山の西坊にて百韻の連歌しける。

光秀　ときは今あめが下しる五月かな

西坊　水上まさる庭のなつ山

紹巴　花おつるながれの末をせきとめて

明智本姓土岐氏なれば、時と土岐とよみを通はして、天下を取るの意を含めり。秀吉既に光秀を討つて後、連歌を聞き大に怒りて紹巴を呼び、天が下しるといふ時は天下を奪ふの心あらはれたり。汝しらざるやと責めらるゝ。紹巴其の發句は天が下なるにて候ふと申す。しからば懐紙を見せよとて、愛

宕山より取り來て見るに、天が下しると出でたり。紹巴涙を流して是れを見給へ、懐紙を削りて天が下しると書き換へたる迹分明なりと申す。けなげにも書きかへぬとて秀吉罪をゆるされけり、江村鶴松筆把りにてあめが下しると書きたれども、光秀討たれて後、紹巴密に西坊に心を合はせ、削りて又始の如くあめが下しると書きたりけり。

一四五　幸田彦右衛門が母義死の事

織田信孝秀吉と弓箭をとる時、信孝の乳の人を人質に秀吉のもとに出だし置かれしを磔にして誅せらる。かの乳の人の子は幸田彦右衛門とて信孝の士大將なり。是れより前秀吉信孝の長臣等をかたらはるゝに、岡本下野守は同心して信孝に背きけれども、幸田は背かず。幸田が母誅せらるゝに及びて子の彦右衛門に書を送りて、我れ今空しく成ることゆめゆめ歎くべからず。親は必ず子に先だつ習ひなり。唯忠義を守りて君にな背き參らせそと言ひ遺はしければ、聞く人感じあへり。天正十一年四月十八日秀吉の先陣信孝の地に責め入る時、幸田兄弟いさぎよく討死したりけり。幸田が母は實に漢の王陵が母の志とも云ひつべし。但し王陵が母は天下をしろしめすべき高祖の事を識りたれども、只今

危難に迫れる織田家に忠を盡せといへる。眞にありがたきことなるべし。

一四六　志津が嶽合戰秀吉智謀の事

佐久間玄蕃盛政柳瀨にて中川清秀を討ち取りける時、秀吉長濱より一騎がけにて來られけり。志津が嶽に到れば日暮れぬ。陣の相去る事二里許なり。盛政使を以て早くも軍を寄せられ候ふ。相待ちて候ふほどに、夜明けなば矢合仕るべしとぞ言ひ送りける。秀吉聞きて是れより申さんにゆゝしくも承り候ふ。明日いさぎよく軍をとげ候ふべしとて使を返して後、吾れに怠らせ夜討せんとの事ならん。遠き異國の張良はしらず。我れを欺るべき者日本に有りとは覺えずとて、野にも山にもかゞりを透間なく焚きて白日の如し。佐久間は敵人馬の行程を急ぎて疲れたる處へ、するりと押し寄せ打ち破らんとおもひけるに、秀吉の謀に夜討の支度空しく成りにけり。

一四七　堀七郎兵衛見切の事

志津が嶽の合戰に堀久太郎秀政兵を分ち出ださんとする時、其の臣堀七郎兵衛押し留めて曰はく、

勝家の陣より佐久間が陣に頻に使來ると見ゆ。疾く引きとれとの事ならむ。若し引き取らば、玄蕃本の道をば歸るべからず。然らば間近き所にて戰有るべし。玄蕃引き取らずば勝家必ず來りて軍あるべし。此の二つを出づべからず。兵を分たずして待つべしといふに、玄蕃も退かず、柴田も進まざりしかば、勝家運盡きたりと云ひしが、果して敗北しけり。又志津が嶽の事を老功の人に問ひしに、勝家の詞のごとく玄蕃引き取らば勝利を全うすべし。玄蕃が言の如く勝家押し詰め來らば、必ず敗軍すまじきなり。兩將互に猶豫して、勝を失ひたりとぞかたりける。

一四八　志津が嶽七本鎗の事

志津が嶽にて佐久間が人數亂るべきを秀吉見て、近習の人々に向つて爰ぞ鎗を合はせよと詞を懸けられれば、各〻競ひ進む。福島市松・加藤虎之介・加藤孫六郎・片桐助作・平野權平・脇坂甚内・糟谷助右衛門七人なり。其の夜秀吉今日の七本鎗の者とて呼ばれけれども、誰れといふ事を知らず。其の時指を折りて數へられしかば、前に進み寄りたり。是れより志津が嶽の七本鎗と世に唱へけり。中にも福島豐番に進んで鎗を合はせたる上、首を取りたりしかば、五千石與へられけり。其の餘は皆三千石與

へられぬ。福島は紙の切裂じなへの指物。加藤嘉明は紫ほろ。清正は紙のしで馬れん。片桐は紙の切裂えづる。平野は紙子の羽織。精谷は金の角取紙のえづるの指物さゝれたりとぞ。

一四九　石川兵助戰死の事

志津が嶽の前夜、石川兵助と福島市松と口論し、既に刺し違ふべき體なりしを、座に有りし面々、明日の軍に身を捨てて高名を遂げらるべきに、こはいかなる事ぞと押し留めければ、石川面々の前にて口も得明かざる市松何とてこはき鎗先に向ふべき。明日わが後影を見よかしと言ひ捨てて出でけるが、直に柳瀬に赴きて只一人眞先にすゝみて、討死しけり。人々其の勇氣はいかめしけれども、其の怒りは戒とすべしといひあへり。秀吉石川が弟長松に感狀を與へられけり。其の文に曰はく、

今度三七殿、依二違貳一軍二美濃大垣一之處、柴田修理亮勝家出二張柳瀬一、欲レ遂二一戰一之時、兄兵助先赴合レ鎗令二擊死一拔群之據、動也於二眼前一見レ之。爾雖レ爲二若輩一、念二兵助之壯志一、與二秩千石一。向後愈可レ抽二忠節一者也。

天正十一年七月五日　秀吉

石川長松殿

とかゝれたり。

一五〇　佐久間盛政生け捕らるゝ事　附久右衛門安次源六郎實政が事

志津が嶽の軍破れて佐久間を生け捕り來る。秀吉見て汝は武勇逞しき者なり。助けて國を與ふべし。二心なからんやと問ふに、盛政冷笑ひ、我れに國を與へなば、汝を生け捕り搦めん事、今日我が身の上の如くせん、新に恩を受くとも柴田を忘れんやといふ。死すべきに及びて大紋紅裡廣袖の小袖白帷子に空だきしてくれられよ、一生の終りに風流を盡したし。是れ一つの望なりと云ひしかば、秀吉其の望に任せられしかば、大に悅んで是れを著たりけり。玄蕃其の時廿七歳みな人をしみあへり。

〔柴田亡びて後、其の從士佐久間久右衛門安次・源六郎實政兄弟紀州に遁れ、粉川法師三池をかたらひ、河内霧坂に城を構へ、後亦南河内天野山の國見を要害にして度々軍しけるが、遂に秀吉に攻め落さる。後に小田原に入り北條亡びて兄弟金澤の稱名寺にありと秀吉傳へ聞き、伯父勝家の

爲に吾れを仇とする志、誠に大丈夫といふべし、今日本平均しぬれば心を改めよとて安次に一萬五千石、實政に一萬石與へて蒲生氏郷に附せらる。兄弟氏郷に一禮しける時、蹴きけるを人皆笑ひしかは、氏郷物の思慮なく、汝等が奉公ぶりを彼れに競ふる事よ、兄弟とも壁障の士にあらざる物をと言はれけり。」

一五一　尼子家の十勇士

尼子家十勇士と世に唱へけるは山中鹿之介・蔵原茨之介・五月早苗之介・上田稲葉之助・尤道理之助・早川鮎之助・川岸柳之助・井筒女之助・阿波鳴戸之助・破骨障子之助なり。

一五二　信雄長臣を誅せられし事

秀吉信雄を打ち亡ぼさんと謀りて、先づ信雄の長臣岡田長門守・津川玄蕃・浅井田宮丸・瀧川三郎兵衛をまねき、懇にもてなして後、信雄に自害をすゝめよ。さらば恩賞あつく行ふべしと語られけり。聞き入れずば首を刻れん氣色なる上、神文を書けよと責められる。四人力なく承りぬと言ひて起請文を

書きにけり。秀吉も約を背かじと神文を出だされけり。是は一人づゝかたらふべきを一同に招きたるは、信雄に告げ知らする者ありて殘る者を誅せさせんとの謀なり、又皆秀吉に實に心服せずとも、既に神文を書きたれば疑ひて一和すべからずと思慮せられたるなるべし。瀧川素倍なりしを信長呼び出だし、四萬石の地を賜はりし身なれば、長島に歸りて信雄に斯くと告げ申せば、頓て三人を誅せよとて長門は飯田半兵衛、玄蕃は土方勘兵衛、田宮丸は森源三郎と討手を定められけり。土方承りて長門をば臣に仰せ付けられ候へ打ち留め申さんと云ふ。飯田既に定りたるうへは何の申條のあるべきぞといへば、信雄さらば長門をば土方討ち候へ、飯田は既に下知したれば討ちたるに同じとて長門を土方に讓りけり。土方が斯く言ひけるに故あり。土方は始め彦三郎と云ひけるが、太く逞しく胸より手足に亙るまで毛生ひ熊の如くにて勇猛の士なり。長門常に土方に語りて、殿は人の申す事輕々しく信ぜられて、日比我れを疎まるゝよと度々云ひけるを、土方夫れはたはぶれか又は汝の心の逆ひたるならんといへば、長門いやいや此の長門をば必ず誅せらるべし、其の時汝討手なるべきよ、容易く討たるべき身にあらずといへば、土方聞きて討手の仰を奉らんに、此の勘兵衛ならで又誰れかあるべきと語りたるに、長門仰に寄りて此の七つ胴切り落したる脇指にて、汝が頭を斬り破らんと云ひける詞に依

りて斯くは申ししなり。天正十二年三月三日の禮に、岡田信雄の前に出でけるを相圖とせられけり。岡田其の日は脇差を横たへて進み出づ。信雄新に造らせたる鐵砲を見よとて指し出だし、此の盞尻の穴は何の爲ぞと問はるゝに、岡田少し差しうつむく時土方つと寄りて引つ組んだり。岡田已れをやといふ儘に脇差を七八寸抽きけれども、大力に强く抱かれて抽きもはなたずれぢ合ひける處を、信雄土方放せ我れ自ら切らんと詞を懸けられしに、臣と共に斬らせ給へとて放さず。信雄放たざればいつ迄も斬るまじといはれしかば、土方岡田を突きはなしざまに小脇差を抽いて指し通せば、信雄すかさず切つて殺されたり。津川は此の騷ぎを聞きて走り來りけるが、信雄に行き逢ひ刀を取り延べて切りたりしに、廊下の長押に切り付けたるを、飯田傍より刺し殺しけり。淺井をば森討ち留めたり。是れよりして秀吉と弓箭をとられけり。

一五三　水野勝成高名附行狀の事

長久手の軍に、水野忠重の嫡子勝成は、目を病みて冑を着ず。鉢卷したりけるを、父見て汝が冑はゆばり壺にしたるかと罵られしかば、父ながら餘りの詞かな、眞先かけて首を取るか、吾が首を敵にとらるゝか二つの中よといふまゝに馬引き寄せて打ち乘り、もろ鐙をあてゝかけ出だす。忠重あれはいかにとて、太田重助といふ士をして呼び歸されけれども耳にも聞き入れず。又水野喜右衛門はせ來り引きとめんとするを、勝成はたと睨んで、壓の上の諫は聞きも入るべし。只今大軍の中にかけ入り功名せん時止まれとて、引き返す襟や有るといひすてゝ、秀次の將白井備後守が陣に突いてかゝり、兜首をとりてはせ歸る。此の日の一番首なり。勝成あら者にて人を物ともせず。忠重の心に忤ひ虛無僧となりて、國々をめぐりて武者修行す。後に忠重死して東照宮勝成に三州刈屋を賜はり、日向守と稱して、大坂の時大和口の先陣として大功有りし人なり。勝成十萬石を賜ひて後、愈々士に下り身をいやしくして、すべて士に貴賤はなきものなり、主君となり從者となり互に賴みあひてこそ、世はたつ習ひなれ、されば大事の時は身をすてゝ忠義をなす事ぞかし、汝等我れをば親と思はれよ、我れ汝たちを子と思はんと常に士にいはれけり。年老いて鷹野に出づる時、行步かなはず、蒲團にのりて士にかゝれ、士番所にてはふとんと共に下に居て、年寄りての鷹狩をかしかるべし、鳥とらん爲にあらず。心ありての事なりと度々いひて打ち過ぎられけり。或時鷹狩の野にて昔勝成に仕へし士を見かけ、いかになつかしや我が方にて祿三百石なりしに、立ち去りて越前にて千石の祿と聞く。今爰に來

られしはいかにと問ふに、彼の士仰せの通、祿は越前にて增し候へども、殿の下をいたはり恐にもてなし給ふなじみ、祿には換へがたく暇乞うて歸り候ひぬと申せば、勝成大に悅び折にふれ思ひ出しし なりとて、即日に祿を增し與へられけり。その後勝成隱居して又鷹狩の時、彼の士の家の門閉ぢたるを見ていかにと問はるゝに。美作守の心に背く事有つて暇を乞ひ走りぬと答へしかば、彼の者は越前の祿千石を捨てて小祿の我が家をしたひて歸りし者なるに、いかに作州は思へるにや、かくいふ勝成は若き時心得過ちて、武藏の金川根笹流の弟子となり、尺八一本携へて虛無僧となりて日本國をめぐり、或時は堂塔に夜を明し、或時は野にも山にも日を暮らし、樣々に艱難にあひ人にも誹られしが、一言虛妄をいふ事なく不仁のふるまひせざりし故にや、今福山十萬石を賜はりぬ、然れども下の情をしる事はこれ虛無僧たりし故なり、返す返すも惜しむべき士を失ひぬるよ、美作は下の事はしられぬぞかし、すべてよき士は主君又は頭の下知をも無理なる事は心服せず、たとへ少しの過ありとも、能き士は二度も三度も知らぬ體して、猶已みがたくば傍輩に諫めさせんものを、美作の政事なげかしきぞと泣かれけるとかや。

一五四　本多忠勝忠勇の事 附忠信の兜の事

東照宮小牧山に陣しておはしませしが、秀吉兵を分ち中入すと聞し召し、敵の迹に從うて向はせ給ふ。小牧には石川伯耆守數正・酒井左衛門尉忠次・本多平八郎忠勝を殘させ給へり。然るに、秀吉大軍を出だして長久手に向はれけるを見て、忠次は秀吉の本陣樂田へ押し寄せ火をかけて攻め擊つべしと云ひけれども、石川秀吉後に變有りと聞きて彌〻怒られなんと强ひて押へて止まりけり。忠勝は秀吉の馬じるしを見るより、僅に五百許引き具し小牧にかけ出て、小川一筋隔てて秀吉に相ならび、長久手さして馳せ向ふ。路にて足輕を進め、鐵砲打ちかけ、一軍せんとすれども秀吉見とる體にて取り合はず。龍泉寺の前にて忠勝馬を川に打ち入れ口を洗ふ。秀吉あの鹿の角の立物の兜を著たるは大將よ、誰れか見知りたると問はるゝに、稻葉伊豫守道朝過ぎし年姉川の軍に武者出立見知りて候ふ、本多平八郎にて候ふと申しもあへぬに、秀吉涙をはらはらと流し、五百に足らぬ士卒をもて、吾が八萬の軍にかけ合はさんとする千死に一生もなきぞかし、然るに道を隙どらせ、己が主君の軍に勝利あらせんとの志、勇と云ひ忠と云ひ誠に類なき本多哉。秀吉逃强くば軍にかたん、あたら者を討つべからずと

て弓鐵砲を制せられけり。斯くて忠勝長久手に馳せ付きたれば、軍終はりて敵味方ともに見えず。こはいかにといふ所に、味方打ち勝ち小畑に入らせ給へりと聞き、もみにもんで追ひ付き率り、御馬の傍に乘りよせ、云ひがひなくも小牧に捨てさせ給ひかゝる軍に合ひ不申と申しければ、聞し召し取りあへず、汝が躬は我が身なると思ひて小牧にとゞめ、後に危き事なくてこそ軍には勝ちたれと仰ありけり。其の後天正十八年秀吉北條を打ち亡ぼし、七月廿六日野州宇津宮にて平八を呼ばれけり。忠勝は下總の臨南に在りけるが急ぎ參る。秀吉諸大將並み居たる中に呼び出だし、熊野より佐藤四郎忠信が兜を得させたるものあり。四郎が忠義後世まで語り傳ふ。四郎に劣らぬ人に著せなんとおもふに誰れか有るといはれしに、答ふる人なし。其の時秀吉四郎にまされる者は平八なり、子細はしかじかなりと長久手の軍物がたり、忠勝の有樣詳に言はれて、即ち冑を忠勝に賜りければ、忠勝面目身にあまる心地して出でられけるに、其の晩又忠勝を招き、傍の人を遠ざけ、自ら茶を與へ、けふいくらも諸大將並み居たる中にて、汝が武勇を褒め擧げたるは秀吉が恩ならずや、主君の恩といづれぞと問はるゝに、首を低れて物言はず、頻にとはれければ、忠勝承り誠に忝しとは申せども、累世の主君の恩とならぶべきにあらずと申されしかば、秀吉愈〻感ぜられけり。

〔一説に、忠信の冑を賜はりけれども悅ぶ色なし。いかにといへば、いやとよ忠信武勇さのみ羨しくもなし、主君と仰ぎし九郎判官も吾が爵位も同じ、唯世々家に傳へたる鹿角の兜こそよけれと言はれしとぞ、後忠信の兜は二男忠朝に讓り、鹿角の冑は嫡子忠政に讓られたりき。忠朝もおもふ所やありけん、其の冑にしころも付けずして置かれきとぞ。〕

一五五　榊原康政秀吉を誹りて札を立てられし事

小牧陣の時、榊原康政秀吉の事を誹りて札に書き、織田家に向ひて弓を引く事不義惡逆の至りなりと書きて所々に立てたるを、秀吉齒噛して怒り、康政が首をとらん者には十萬石の地を與へんとぞ觸れられける。其の後東照宮と和平して婚姻の約ありける、始の使に康政を賜はるべしと秀吉申されて京に上りしに、秀吉對面し、小牧にて札を立てたる時汝が惡き首を一目見ん事をのみ思ひしに、今斯く和睦に及べば其の志を悅び思ふなり。此の事を直に言はんが爲に迎へたり、小平太と呼ばんはいかゞなり、叙爵然るべしとて式部大輔とは此の時よりぞ申しける。偖て饗禮有りて厚く馳走ありけるとぞ。

一五六　初鹿傳右衛門の事

勝頼亡びて後、武田家の士多く東照宮に仕へ奉る。前に領したる祿知を書きて奉れと仰せ出だされけるに、初鹿傳右衛門は加藤駿河守が二男にて、兄の源五郎は川中島にて討死しけり。傳右衛門其の祿を繼ぎたりし故祿地を書き出だしけるが、駿河守が二百五十貫の地をも合はせて書き記せり。駿河守が嫡子丹波三男を彌平次と云ふ。兄弟共に傳右衛門は源五郎が祿をこそ申すべけれ。駿河守が祿を合はする事の有るべきかと言ふ事聞えて、本領四千貫のみ下し賜はりぬ。傳右衛門人は皆親兄弟の祿地を記し出だして其の儘賜はりたるに、吾れひとり不然とて御朱印に墨を塗り、詔はざるゆゑにかゝる有樣なりといふを、岩間大藏左衛門訴へ申して無禮なりと仰有りて祿を召し放さる。翌年長久手にて傳右衛門密に御旗本に來り、眞先かけ三宅彌次兵衛と爭ひて首を取る。傳右衛門は内藤四郎左衛門が傍に參りて申し給はらんやと云ふを、其の間十間許にて御覽ぜられ、傳右衛門連れ來れと仰せられしかば、御前に跪く、いかに汝が無禮なれども、けふ軍の先がけしたりければゆるすぞと御詞に、傳右衛門涙を流しける時、三宅先に臣を一番高名と御詞をかけさせ給へど、傳右衛門は猶進みて首を取り候ふと申しければ、三宅が實なる志を感じさせ給ひけり。

一六〇　秀吉東照宮の御陣へ戰書を贈られし事

東照宮の小牧の陣を、秀吉二重湟の城の櫓に上り見やりて、高山右近大夫幸任を呼んで小牧に書翰を送り、一戰せんと思ふなり、十三萬の軍兵陣を整へて押し出だし、後に柵の木結ひて引き退かざる手立せんはいかにと云はれしかば、高山是れは思し召し止まらせ給へ、小牧よりの返書必ず怒らせ給はん事を申し來るべしといへども、秀吉增田長盛に書翰を書かせ、長岡忠興に敵陣の木戸なる道に立てよと下知せらる。高山色を變じ仰なりとも行くなとぞ制しける。秀吉忠興は弓箭のはげしき所へは思ひもよらじ、剛の者を使にせんと言はれしかば、忠興高山を睨みてつと立つて馬に乘り、竹に書翰を挾み乘り行きてむらだつたる松原の小塚の上に押し立てて歸るを見て秀吉悅ばる。やゝ有りて小牧の陣より月毛の馬に乘り紅の母衣掛けたる武者書翰を取りて歸る。しばらく有りて金の枇杷へらの指物さし、鹿毛なる馬に乘りたる武者、書翰を竹にはさみ元の所に立てけり。あれ取り來れと言はれしかば、忠興又馬に乘り馳せ行きて取り歸るを、秀吉披きて讀まるゝに、東照宮の返書にはなく、彼邊

半藏重綱・水野太郎作正重が書翰にて、其の詞に後に柵結ひて一足も引くまじと思ひ定めて、軍あらん事兎も角もの事に候ふ。三河者下部に至るまで、一足も逃ぐると申す事露許も不レ存候ふとぞ書きたりける、秀吉讃みも終らず怒られければ、高山されば斯く候はんとて申したる事よと居たけ高に成りて申す。秀吉冷笑ひ馬率き出ださせ、ひたと乘り僅四五騎許にて松原の小塚に上り、臀を打ちたゝき敵の大將是れ喰へと大音に呼ばるを、小牧より唐冠の兜に孔雀の尾の羽織著たるは秀吉よ、あますなとて鐵砲を打ちかくる。秀吉天下の大將軍には矢の中る物かはと言ひて、しづしづと歸られけり。

一六一　東照宮蟹江御出陣の事

尾州蟹江に瀧川一益中入すと告げ來る時、祐筆尊通といふ者御出馬可被成者也と書きけるを、東照宮此の可の字を削れ、今日に於ては一字も大切なり。大敵を前に置き可二出馬一とはおくれたり。出馬するとは其の時をぬかさぬなりと仰せられけり。

一六二　東照宮の御軍略に依りて蟹江城降參の事

東照宮長久手の軍に勝たせ給ひ、勢州蟹江の城前田與十郎を御攻めあらんとて打ち向はせ給ふ所に、加勢多く馳せ入りけるを御覽じて、敵いかほども城中へ入れよと仰せられしを、酒井左衛門尉忠次承りて何とて押し留め給はぬぞやと申す。東照宮いかゝ思ふぞと御尋ねありしかば、忠次城は堅固なり多勢こもりなば爭でか攻め落すべき、いかなる御心か候ふと申すを聞し召し、大將謀を言ふやうや有ると仰せられけるが、其の後援兵の乘り來りける船を追ひ拂はせ、粮道を絶たせ給へば、粮忽ち乏しくなりて城を渡し降參しけり。東照宮四十二歳の御時なりとかや。

一六三　九鬼嘉隆蟹江の港出船の事

蟹江にて井伊直政兵をすゝむ。秀吉の舟手大將九鬼大隅守嘉隆、日本丸といふ大船に乘り、蟹江の港に漕ぎ入れて打ち上り、堤を隔てて戰はんとせしが、引き退きて船に乘るところに、入江の港に東照宮の兵船角新造といへるを横樣にして、左右に亂杭をうち、眞中に取り圍まんとす。直政は追ひかくる九鬼が者共多く討たれ、水主梶取驚き騷ぎて船を出だし得ず。かゝる處に九鬼が士村田七兵衛鐵砲に藥を込め、間宮造酒允が舳先にて下知しけるに、大音上げて靜かに相だめにするを、兩軍なりを靜

めて見物す。其の中に九鬼が者共ひたひたと船に乘り組みたるは、村田が躬を捨ててしづめん爲の謀ゆゑなり。斯くて村田おもふ矢坪に中りて間宮倒れしかば、九鬼が者共力を得鐵砲を打ちかけ、船を乘り浮めて港を出でにけり。

一六四　中村一氏紀州の一揆を追ひ拂はれし事

秀吉小牧に陣をいだす時、紀州の根來・雜賀の一揆を押へんため、中村式部少輔一氏を岸和田の城に置かれけり。紀州の一揆秀吉大坂を打ち立つと聞きて、二萬三千許二手に分かれ、一手は東の山際より堺に向ひ、一手は岸和田に押し寄す。はやり雄の若者ども二騎三騎城を出で寄手に向ひしかば、士大將早川助右衛門・川毛惣左衛門引き歸れと使かやるを、一氏聞きてかゝる時進んで行き重なりたる武者を引かんとすれば敗北するものよ、いざ打ち出でんとて鐵蓋が峰と名付けし兜の緒をしめ城を乘り出だす。先に進んだる者共菅笠の馬印をふりかへり見て、すはや殿こそ出で給へ軍は勝ちたるよと言ふ程こそあれ、一萬餘の紀州勢に面もふらず切り掛かり打ち破りて、七筋に分れて逃ぐるを追ふ。一氏は三百許にて堂の池といふ所に控へて先陣の歸るを待つ處に、堺海道に馬煙くらう見ゆ。是

れは堺に向ひたる敵の返し來れるなり。殿手の大軍にかけ合ひて戰はん事思ひもよらず、疾く城にたて籠らんと口々にいへば、一氏いやいや退くならば味方氣挫けて打ち負けなん。一寸も退く時は先陣を捨て殺し城をも攻め落さるべし、一揆は何百萬もあれ、先陣をだに切り崩すならば二陣は忽ち敗北すべし。我れに任せよとて敵の一同にかゝりがたき地の理を料り、堂の池を前にして大敵を待たれけり。一氏馬をば悉く城へ返し候へ、馬を引き付け置く時は、引き退きたき心の起るぞとて將儿に腰かけ、旗本三百許の勢鉾を膝の上に置きて折り敷きたり。新藤勘左衛門强弓矢繼早の手利なるが散々に射る。射しらまされて手負死人倒れ重なりてためらふ時、一氏弓の者の羽壺を勘左衛門に渡せと下知せられしかば、愈〻指し詰め指し詰め射ける。矢にあだ矢なかりけり。一氏麾を取りかゝれというて立ち上る。黑田如水は大坂にありしが、岸和田に敵押し寄すると聞き、子の長政十四歳になりしが岸和田にあれば、いざすくはんとて、七百許にて敵の後にかけ來るを一氏見て、愈〻すゝみをめきさけんで切つてかゝり、追ひ立て八百餘の首を取りたり。如水は長政いかにとおもふ處に、黃絹紗の羽織著て鹿毛なる馬にのり、今朝討ち取りし首を鞍の四方手に付けて、馳せ巡るを見て、悅ばるゝ事大方ならず。秀吉一氏に感狀賜ひてけり。一氏は豐臣家諸將の中にも勝れし勇將なれば、加藤嘉明もうら

やみ暮ひて、吾が子の明成を式部少輔になしけるとぞ。

一六五　竹中重治の事

竹中半兵衛重治は美濃の菩提の城主なり。後に秀吉の軍奉行たり。謀畧有る人なれども打ち見る處は婦人のごとし。軍に臨む時も猛威なる事なし。馬の皮にて包める鎧を著、木綿の羽織一の谷と名付たる兜の緒をしめ、靜まり返りて居けり。重治向ふ度ごとに士卒戰はずして既に勝ちたりと勇みあへり。重治或時軍物語せしに、子の左京いまだ幼かりしが座を立ちければ、重治軍は國の大事なり何方に行くと問ふ。厠にゆくと答ふ。重治爰に溺をたるゝとも軍物語の大事の席を立つ事やあるといかられけり。

一六六　戰國の士功を讓る事

稻葉治左衛門は美濃齋藤家の士、戰場にて必ず眞先に獨進み出で、芒の如くなる所に居ける故、世の人是れを芒の治左衛門と言ひけり。澤喜藏は美濃・飛驒に隱れなく、若き頃より功名有り。芋がら

畠の鎗澤一番なりと言ふを、吾れには非ず稻葉なりと云ひて互に讓りて決せず。澤は早く進みたれども、稻葉がほろの手をしむる隙に先に乘り込んだり。實は一番稻葉なりといふ。人皆是れを賞しけり。有吉武藏が足輕鐵炮に鎗を持ち添へて鐵炮を搏ち、其の上に壹番鎗を合はせたるが、吾が壹番にあらず園部儀太夫がほろの手をメむるを見て駈け出でぬ、園部が壹番なりと讓りしと同事にて、戰國にかゝる士はまれなる事にこそ。

一六七　羽柴勝雅敵を免す事

羽柴下總守勝雅の許に二藏三藏とて物し有り。何れの城にての事にや有りし。下總守城より出でて働き引き取りたるを敵付け來る。二藏三藏門を固め、揚簀戸を下して敵をたてこめたり。勝雅下知して門を明け、敵二人を出だして討ち取らず。近藤石見守加勢たりしが、其の子細を問ふ。たてこめられたるは死地に入りたる敵なり。是れを討たば城兵餘多死傷すべし。打ちとめたればとて軍の勝敗にあづからずと答ふ。石見守武功の人なりし故大に感じたり。

卷の七

一六八　前田利家末森城後卷合戰の事

瀧川一益・佐々成政等信孝を推し尊みて秀吉と弓箭を取りしに、天正十二年九月成政八千の兵を率ゐて、加州金澤の城主前田利家の士大將奥村助右衛門永福（後に伊豫）が守る所の能登の末森の城を圍む。成政旗本を以て後卷を押へ嚴しく攻むる。此の城だに打ち破らば能登は一日に討ち從ふべし。後卷なき中に乘り取れと下知しけり。奥村僅に三百許の士卒にて爰を詮度と防ぎけるに、餘りに强く攻められて今は是れまでなり自害せんと云ひけるに、助右衛門が妻小袖をかい取り鉢卷をし刀を横たへ、女房に粥を手桶に入れさせ塀裡の人々に自ら飲ませ、昔楠とやらん云ひし大將の日本國を敵にして城に籠りたりきと聞く、明日は金澤より後詰の候ふべきに、只一夜防ぎ給へと云ひて打ち廻るを奥村見て、けふの振舞男子に優れり。此の城を女の力にて持ち得んは口惜しと自負の色あり。此の城たやすく落つべからざるを見て火攻にせんと云ふ者あり。成政いやいや大手の城門を取つて富山の城門とすべし。又石動山の衆徒も吾れに心を合はす。火攻にはすべからずと下知して、既に二三の丸を攻め取りて夜

の明くるを待ち居たり。末森より金澤へ行程九里許、其の日酉の刻に斯くと告げて夜の明くるまでは堅く守るべしと申し送る。利家聞きもあへず金澤の城の廣間へ出で、利長を呼んで汝は城の留守せよと下知せらる。利長いやいや眞先かけて佐々を打ち破るべし。殘り止まらん事思ひもよらずと申されければ、利家さらば父子打ち向ひ敵の不意を討つに利あらん。軍兵を整ふるに及ぶべからず。馬に鞍だに置くならば一騎がけに打ち出でよ。一足も疾く出づるを今宵の功とすべしとて、富田與五郎（後に長守）に汝津幡に行きて不破彦三に末森の後卷の先手せよといへと下知せらる。富田已が宿所に馳せ歸り馬引き出だし打ち乘り、諸鎧を合はせてかけ行きけり。利家士卒みな汁をかけて飯をくへとて物具せらる。庭には黑の馬を引き立てたり。利家の北の方（後に芳春院）三方にのしを入れ父子に參らせられ、扨て人々聞き給へ。我れは利長の母なり。今日の後卷は誠に大事の軍なるべし。各々心を合はせ功名し給へ。末森を敵を取られなば各々逢も討死し給へ。我れも人手に懸り候ふまじとて利家の側近く進みより、末森を敵攻め落しなば討死せさせ給へ。利長も母が此の詞を能く聞かれよ。主死の別れなりといはれしかば、利家あら心よや。成政を打ち破らん事必定なりといひもあへず、物具の上帶をゞめ結べる端を切つて捨てて馬に打ち乘る。父子の兵五百許に過ぎざりけり。利家馬上にて、味方の小勢は吉事な

り。佐々が思ひもよらざる所に切つてかゝり打ち勝つべし。奥村討たせなば生きがひなしと言ひつゝ、津幡の町を北へ打ち過ぎられたる時、富田乘り來る。津幡は金澤より四里餘りの行程なり。利家汝いづくに寢て有りけるぞと罵らるゝを、富田聞きて津幡に馳せ付き不破が門を叩き申し渡し、不破が物具著て候ふを見て打ち出で候へば、はや門外に旗を指し出だしぬ。いづくにか寢申すべきといふ。利家尙聞き入れざりしかば、富田怒つて其の日の一番鎗を合はせけり。是れ利家士を激するの術なるべし。利家の士卒追々馳せ付きければ三千餘に成りけるを、二陣に分け、一陣は敵の後に打ちかゝり、一陣は敵の旗本に突いてかかる。成政軍兵疲れし上思ひ寄らざる所に、奥村も門を開きて打つて出でしかば、成政大に敗北せり。是れ天正十二年九月十一日の軍なり。後に聞くに、成政山の尾崎を越え敗軍を集め陣を立て直し、見よ見よ今前田といふ男が勝に乘り陣を亂してかゝり來るべし。大返しにして利家を打ち取るべしとて物見二騎を出だしが、乘り歸りて敵は城を後にあて靜まりかへりて、かかり來るべき物色候はずといふ。成政謀違ひけり。

〔末盛後卷の事加越合戰記に見えし處大同小異にて、詳なる故併せて爰に記す。利家は加州の内石川・川北・能登全州を治め、金澤の城に在り。成政は越中の守護にて新川郡富山の城に在りしが、

越中立山さらさら越の難所を、僅に從者百許にて忍びて打ち通り、東美濃へ出で、秀吉と織田家の弓箭大敵にたやすく勝ちがたからむ。成政北國より攻め登りて、前後より挾み打ちて秀吉を亡ぼしなんには、加賀・能登・越前三州を賜はり候へと信雄に相約し、またさらさら越より富山に歸り、佐々平左衛門・神保安藝守と相計り、成政の二人の女ありし中、一人は秀吉へ人質に出だし置きたりしかば、其の妹を利家の二男利政に娶すべき由を平左衛門して言はせしかば、兩家絲を結び目出度しといひあへり。天正十二年七月廿三日成政の使、佐々平左衛門金澤に赴き祝の物取り揃へ相贈りけり。利家篤實の人なれば成政の奸謀有りともしらず。引出物して悦びの上、村井又兵衛を謝禮の使とせらる。成政八月は忌み候ふとて延べ置き、夜々北の橋にて軍評定せられけるに、心付きて密に利家にしらする者あり。利家虛實辨へがたしといへども、怠りて不意の變に打ち負けなば、弓箭とる身の耻辱なりとて、加越の堺朝日山に城を構へ、村井又兵衛を大將として、千五百餘りにて守らしめんため柵を付け廻る處に、八月廿八日成政より佐々平左衛門・前野小兵衛に五千の兵を指し添へて押し寄せたり。加賀の者共居住の支度せんとて、金澤に歸りたるも有りて、折節七八百には過ぎざりけり。されども村井大剛の者にて味方を勇め立つる處に、利

家馬廻りの士阿波賀藤八・江見茂十郎見廻に參り合せしが、急ぎ歸りて注進を賴まばやと云ひければ、兩人色を變じ金澤にありとも斯かる事を聞かば馳せ來るべきに、參り合せたるこそ幸なれ。然るに空しく歸れといふ事や有ると怒りければ、村井聞きて誠に賴母しき事悦ぶに餘り有り、但し路次に一揆起りなんは必定なり。各〻歸りに恐あらば爰に止まられよと云ひしかば、兩人此の詞を聞きて扨ては路の一揆を恐れて歸るまじとや、さらばかけ歸つて申さんとて馬に打ち乘り、金澤へ四里半許なる道を只一時に馳せ歸り斯くと申せば、利家さらば後卷せよとて不破彦三・田野村三郎四郎・片山内膳・岡島喜三郎・原隱岐・武部助十郎などを打ち具し、貝を吹かせ揉みにもんでぞ急がれける。折しも大雨降りしかば成政の兵も一時に攻め破りがたしとや思ひけん。城を攻めずして引き歸しぬ。是れより和談破れければ、能州七尾には利家の弟五郎兵衛安勝・同孫右衛門良繼・高畠織部・中川清六・長九郎左衛門等三千餘にてこめ置き、能登・加賀・越中の堺末盛に奥村助右衛門に、千秋主殿助・土井伊豫を添へて千五百許こめられたり。加州津幡の城には前田右近、越中の堺鳥越には目加田又右衛門・丹羽源十郎を籠められたり。成政も俱利加羅の嶺に城を構へ、佐々平左衛門二千餘、利波の城には前野小兵衛に二千、青山の城には國士菊地伊豆守、

荒山に城を築き神保安藝守氏春の家老袋井隼人に守らせて、七尾の押とす。神保は成政の聟なり。四千の兵をもて森山を守りけり。利家斯くと秀吉に告げられければ、秀吉聞きて佐々を疑ひ、加州に又左衛門を置きつるは吾が謀りしに違はざりけり。利家兵少しといへども、必ず成政に切り勝つべし。頓て師を出だし成政を討ち亡ぼすべきよとて、使者に黄金三十兩與へられぬ。九月十一日成政末盛へ押し寄せ、二里許かたへの坪井山に切所を前に當てて陣し、佐々平左衛門・山下甚八・前野小兵衛を始として八千餘攻めよせ、外構の町家に火をかけんとす。土井伊豫敵に町家を燒かれては生きがひなしとて、二百許にて突いて出で散々に戰ひけれども、大敵にかけ合はせ終に討死す。城兵も爰を專途と防ぎける間、速に落つべしとも見えざりしかば、成政後卷心元なしとて、神保安藝守氏春に四千餘を差し添へて、川尻といふ所に陣して加州の道を塞ぎたり。利家末盛より告げ來ると等しく金澤を打ち立ち、不破彦三・村井又兵衛を先陣とす。

〔一說に、成政きびしく攻めて、二三の丸水の手を乘りとり本丸に攻め詰めたり。末盛の飛脚息切るるばかりに金澤に馳せ來り、文箱を投げけるとぞ。〕

十一日未の刻の事なり。末森は水に乏し、廣岡の水を汲みてさゝいに入れ、急ぎ追つ付けよ、後

卷の土産にせんとぞ下知せられける。偖同國松任といふ所、金澤より三里許隔りて利長居城なれば、とくとく末森へ向はれよと言ひ送られけり。金澤より四里許なりける津幡の城へ急ぎ押し付けられしかば、弟の右近秀繼廓外に出で向ひ、利長を待たるべきかといはれしかば、城に入れしに利長戌の刻ばかりに津幡に馳せ著かれけり。利家悅んで吾れ成政と若き頃より數度の軍に逢ひつれども、利家を越したる事一度もあらず。されども成政侮るべきには非れども、無二無三に一合戰して勝利を得ん事掌の中にありと、大音揚げて呼ばはり勇み進まれけるに、寺西治兵衛入道右近と相議し、はや末森は落ちたるならん。殊更川尻に神保多勢にて道を切り塞ぐと聞えければ、後卷はいかゞ候はんと申す。利家大に怒りきたなき諫は必ず口にも出だすまじき事ぞとよ。人は一代名は末代とこそきけ。奥村や土井を捨て殺して已來、たとへ日本の主となるとも此の恥辱雪ぐべからず。成政大軍にもあらばあれ。吾が馬迴り許にても快く軍して勝負を決せん事不足なし。いかに村井汝は如何思ふぞ。是非一戰と思ひ定めたるぞと詞をかけられしかば、又兵衛聞きもあへず有無の一戰の外何の是非か候ふべきと云ふ。利家悅んで村井が心も吾れに同じとて早打ち立たれしに、右近茶漬飯を進め且つ上手の占師の山伏の候ふ、召して軍を占はせられんやと

問ふ。利家景色よかられど夫れ夫れとて呼び出だされけり。五十許の山伏なり。懐より書物を取り出だす。利家ともあれ後卷に決定したるよ、能く見よといはれしに、山伏書物を懐に入れ今日吉日なり。時も吉時なりといへば、利家汝功者なり、頓て打ち勝ち、賞美すべしと快げに打ち出て、勇み進んで押し行かれけり。村井・不破先陣、原隠岐・前田又次郎・片山内膳二陣、田野村三郎四郎・青山與惣兵衛・近藤善左衛門・前田嫂次郎押し續く。宮川但馬武者奉行たりといへり。川尻のこなた一里許高松といふ所にて、利家兜を取つて著忍びの緒の餘りたるを切つて捨てられしかば、偖は今日を限りの軍よと人々生きて歸るべしと思ひもよらず。篠原勘六とて利家の近習の士二十三に成りしが、横根を煩ひ起臥も心に任せず。されども是非打ち立つべきとせしを、汝は殘り留りて、吾れ討たれなば堅く城を守りて秀吉の後卷を待ち候へ、叶はずは其の時腹を切れと下知せられしかば殘りけるが、乘物に乘り與力の士二十騎打ち具し、川尻近く成りて馳せ付き、篠原勘六參り候ひぬと大音に呼ばはりければ、是れを人々聞き天晴剛の者なりと云ひあへり。川尻よりは津幡に人を付けてうかゞはするに、馳せ歸りて前田父子津幡まで出でたれども、後卷有るべしとは見えずといふを聞きて、神保は大に備をゆるめけり。利家先陣に乘り行きて、村井・

不破に濱際を一騎打に馬の舌を卷かせ、いかにも靜に押し通れと下知せらる。神保は兵を押し出し待ちかけたりと物見の言ひしかば、又富田越後（此時六左衛門といへり）を物見とせらる。馳せ歸りて敵は一人も候はず。川の杭の多く候ふを人と見誤りたるならん、とうとう押させられ候へと申す。利家川杭とは何を證にせんと問はるゝに、越後されば候ふ武者ならば並びの揃ひ候ふ事有るまじと存じ、猶も慥に見ん爲に川中まで馬を打ち入れて心靜に見て候ふ、是れを見損じ候ふ程ならば再び弓箭は取るまじと申す。利家汝が見る所こそ正しけれ。士の手本にせよと悅ばれけり。偖て兵を進めて押し通るに、神保是れをば夢にも知らず。後れて聞き付けたれ共、利家は今濱といへる右の上なる山に兵を押し付け陣せられしに、夜明にければ利家馬を乘り廻し、兵粮を遣ひ候へ、今日の軍勝つべき事心易かるべしと下知して、みな馬より下りたり。爰にて見れば利家七八百許、兩先陣千三百許、旗本千五百には過ぎざりけり。利家けふの軍に功名せん輩は取り分けて賞すべし。若し討死せば必ず子孫を見放すまじと高らかに下知せられ、夫れより山を下りて兵を進むるに、道二筋有り。一筋は末森の道、一筋は成政旗本への道なり。村井・坪井山へ押し寄せ、成政を虜にせんと申す。利家聞きて尤もなれども、成政必ず嶮を前に當てて陣すらん。たゞ末森へ馳せ付け敵を追つ崩し、城中の者共に力を付けんは如何。村井承り可レ然候ふ。城中の士ども只今の仰を承り、さぞ辱がらんといへり。程なく末森近く押し詰めたれば、村井が者共餘多首を取り來る。末森には二の丸に籠りたる千秋主殿助・滝津金右衛門已下寄手攻め入るを追ひ出だし、力の限り戰ひけるが、討死餘多に及べり。本丸も既に危く見ゆれども、奥村助右衛門少しも氣を屈せず、支へ戰ひける處に、砂山に當りて朝霧の晴間に利家の馬印見えしかば、力を得勇み悅ぶ事大方ならず。今少し後卷遲かりせば城陷るべきに、運を開きしは偏に利家迅速の兵機を得られし故なりけり。村井又兵衛・田野村三郎四郎を始として、鎗を打ち入れ散々に戰ひけるが、成政先陣の大將佐々與左衛門を村井突き伏せければ、士三十餘人枕を並べて討死す。利家の先陣佐々を討ち取り、関を作りかけ切り崩ししかば、寄手敗北しけるを、利家見て搦手へ廻られけり。寄手にも究竟の兵餘多有りて待ちかけたれば、利家旗本五十騎ばかり靜にかゝりける所に、半田半兵衛眞先に進み一番鎗と名乘りける所を、櫻甚助鐵炮にて擊ちたりしかば、左の手に當り鎗を抱いて倒れたり。半兵衛と甚介は從弟なりしが、指物にて見知りける故、甚介も半兵衛ながらへずば不便なる事をしたるよと、涙を流しけると後には聞えけるとかや。利家敵の鐵炮烈し延々にせば叶ふ

まじ。たゞ懸かりて迫ひ崩し候へと、金の切裂の采配を取つて下知せられしかば、會釋もなく競ひかゝりて揮し崩す。寄手餘多討たれて敗北せしかば、金澤の士勝閧をどつとぞ上げたりける。利家城中に乘り入りて奥村をはじめ詞をかけ、今度籠城の働言語の及ぶべきにあらず。利家いかにおもふとも汝がいひ甲斐なくて城を明くるか、又攻め落されなば口惜しかるべきに、かゝる功名やあるといさめ立てらる。其の時野村傳兵衛・山崎彦右衛門一度に鎗か合はせたりとて一二の爭論せり。利家牛田が眞先がけしたるに冥加なく深手負ひ、志を遂げざれども勇士の志は顯はれたり、二士一同に鎗を合はせたれども、傳兵衛名乘りたれば、一番をば野村に極めたるぞと下知せられ、二人に千石の加祿を與へられけるとぞ。牛兵衛は庇いえて二千石與へ、士十五人與力に付けられたり。成政の旗本へも後卷のよし聞えしかば、さらば一軍せんとて八千許押し出だす。利家是れを見て此の勇める勢には百萬もあれ恐るるに足らず、先陣は又兵衛せよ。二陣は城主なれば奥村、三番は木破彦三と定められけり。能州の國士長九郎左衛門四五百許にて馳せ來る。激味方分明なれば物見をやるに長が兵なり。遲く馳せ付きつる事口惜しき事なり。弓箭の冥理に盡きたりと憤りけるを、物見の脇田善左衛門・野村七郎兵衛聞きて馳せ歸りて具に申せば、利家

長を感ぜらるゝ事大方ならず。皆とりどりに長が志を褒め立つれば、努々後れたるに非ず。淺からざる譽なりと誓紙を添へたる書を長に與へられたり。成政いかに思ひけん、打ち出でたる兵をひきまとひ山に添ひて引き退く。折しも武者修業して來たり居たりし本多三彌は無二無三にかゝりて成政を打ち取るべきにと云ひけれども、猛將の成政なればこそ手輕く引き拂ひたれと人々言ひしかば、付き慕はずして止みにけり。打ち取りし首七百五十三とぞ聞えし。利家は成政城を攻め落さず空しく引き返す事を怒り、引き退く體にして、津幡の城へ寄せんも計り難しとて、奥村を城に止め兵を餘多指し置きて末森を打ち出でられしに、追ひ迫ひに兵加はり一萬許りに成りにけり。又不破・村井を先陣として濱邊に指し懸り、津幡に馬を入れられしかども、成政は津幡に押し寄せずして引き取りけり。佐々が軍兵金ののしの指物したれば、坪井山は輝き渡りて見えけるを利家打ち眺め、あはれ見事なる備立よ、頓て成政を攻め亡し、我が士卒に指すべきよと言はれけるとぞ。秀吉此の勝利を聞き日本に比類少き武功と賞せられぬるとかや。利家奥村に其の日持たせられし馬印金の切裂の采配、著られし甲冑を賜はりて賞せられしといへり。」

一六六　利家鳥越城を攻めらるゝ事

天正十三年四月八日前田利家金澤を打ち出で鳥越の城に押し寄せらる。鳥越の城は金澤よりもと兵を入れ置きたるが、去年末森の時城を明け退きて、成政の軍兵入り替はり守りければ、利家是れを憤りて攻め落とさんとの志なり。城兵も久瀬但馬守其の外選みたる者共五百許、門を開いて突いて出で利家の先陣を追ひ立つる。利家は傍なる山の上崎に陣して馬を立てられしに、味方敗北するを見て山崎少兵衛は如何したるや、早返すべき鹽合なるにと言ひも終らぬに、白き羽織にて進み出でたる者の候ふといへば、利家山崎出でたるよ早味方勝ちたるぞと言はれけり。旗本の早りをの者共かけいてんとするを、敵の勢競ひ懸りて足の踏み止めがたき時なり。今少し待ち候へと下知せらる。德山五兵衛只今鎗を合はせたると見えたり。血煙立ち候ふと言ひけり。然るに近邊の越中の兵城々より助け來て、敵の陣は黑けれども、山崎が與力鷲津九藏と名乘り鎗を打ち入れたり、早かゝられ候へ、左なくば九藏危しといへども、山崎靜まれと云ふ詞の中に九藏倒れたるを見て、山崎進み出で槍を打ち入れ押し崩して、城際まで追打にしたりけり。城兵門を鎖し固めければ、利家强ひて攻めずして引き返されぬ。

此の軍の前利家の近習の士九里少藏勘氣を蒙り居たるが、成政馬廻りの將杉江彦四郎と組打して谷へ落ち組みしかれ、杉江刀に手をかけたる處を、下より少藏小脇指にて具足の鎖のはづれを刺し通し刎れ返しけれども、氣つかれて首をとることを得ざりしに、片山内膳が從卒來りて少藏を押しのけ、相討と云うて首を取りたり。利家細やかに事を糺明して少藏が功名に定まり、勘氣をゆるし鞍置馬を與へられけり。

一六七　本多重次强諫の事

天正十三年三月、東照宮濱松の城にて疔を病ませ給ひ、近習の若き人に膿を强く押させ給ひしにより痛み甚しく、すでに事切れさせ給ふと城下には申しける程の事なりけり。今はかうとや思し召しけん、御遺言を仰せいだされしに、本多作左衛門重次參りて先年臣を療養せし糟谷政利入道長閑が藥を付けさせられよと申しけれども、聞し召し入れさせ給はざりしかば、作左衛門大に怒り、殿は徒に死し給はんよ。此の作左衛門は年老いぬれば、只今自害して待ち奉るべしとて座を立ちけるを御覽にて、いかに作左衛門氣狂ひたるか。未だ存へたるに自害とは何事ぞ。吾れなからん後こそ大事なれと申

されし時、作左衛門夫れは人によりての事に候ふ。若き時より幾度となき軍場に數ヶ所の手を負ひ、世の中の畸といふ畸は身一人にからげ候ひぬ。今日迄殿の御情にて人がましくも候ふなり。只今殿過ぎさせ候ひなば、北條を始めとして敵國攻め來らんに、殿におくれ奉りはかばかしく軍する者や候ふべき、國は忽ち滅亡すべし。其の時作左衛門は路の邊に餓死せん。存へたらば、あれこそ德川家に奉公せし本多作左衛門よ。何を賴みにながらへたるなど人に嘲り笑はるべし。近き頃武田の内にて甘利殿とて人の敬ひたる人も、武田の運盡きぬれば今は本多平八郎が組となり、かがまり居るを見るも哀れなり。是れは人の上ならず。勝賴の不道にて滅亡したるも、殿の藥をきらひ給ふも同じ理に候ふと申せば、東照宮尤もなりとて長閑を召し頓て藥を奉り、癒を大にして作左衛門すゑ奉りければ、夫れより痛みやゝ輕くならせ給ひければ、作左衛門聲を上げ泣いて悅びきとぞ。

一六八　秀吉東照宮に和を乞はれし事

天正十四年正月秀吉織田源五郎長益・羽柴下總守勝雅・天野作左衛門三人を使として、東照宮に和平を乞はれけり。三人歸つて和平おもひもよらず重れて來らば、首を切らんと德川殿申されし由申し入

る。又かされて三人を三河に遣はし强ひて和平を請はせらる。東照宮三河の吉良にて左の手に鷹を据ゑさせ給ひて三人に御對面あり。三人申しけるは信雄卿の厚恩を忘れての事には候はれども、秀吉計略し、瀧川三郎兵衛に羽柴の姓を與へ下總守になし、神戸の城主とし三萬石の加祿し、其の外數多都に妻子を置き自ら人質と成り候ひぬ。さまざまの謀候へば此の度和睦候はずば秀吉軍を出だし、清洲にて勢揃して打ち向ふべきなり。四國中國の兵も相加はり、去々年小牧の時より兵十萬も多かるべし。ゆゝしき事に候ふと申しければ、東照宮聞し召し去年十一月伊勢の奈合にて信雄卿と和平の時、わが方にも已來別の事あらじなど云ひたるも我れをたばかるの謀にて、吾が家の石川伯耆守に十萬石與へて我れに背かせたり。吾れ弓箭を取つて發向せんと思ひしかども、織田殿の國を打ち過ぎて軍せん事いかにと怒を押へて止みぬるに無禮の事どもなり、秀吉清洲にて勢揃せんこそ望む所なれ。鳴海表にて一軍まゐるべし、然らずば東美濃に打ち出でて土岐・遠山・惠奈三郡を切り取るべしとてむちを指し上げられ、此の鷹一もとにて手配すべしとて打ち笑はせ給へば、三人歸りて秀吉にかくと申す。秀吉聞きてさても大勇將かな。今夜思慮すべしと言はれし時、丹羽長重進み出で必ず軍は思し召し止り給へ。長重が士ども刀の鞘袋を設けし故、子細を問ふに鞘に三ツまきを拵へ、合戰の時は鞘袋を捨

てて、三河武者に紛れ命を助かるべき支度なりと申しも果てぬに、蒲生氏郷・堀秀政も、みなみな士卒其の心得に候ふ、萬に一ッも利候ふまじといへば、秀吉よしよし德川家を打ち破りて各〻に見せん物をとて止みければ、三人退出し、道にて彼の猿は死所なくて物に狂ふかと私語きたり。翌日諸將をあつめ三河を打ち滅さんは安けれども、智勇の大將なれば吾れ日本を治むべきとを相談せん爲に、緣を組み妹を嫁して和平せんとて又三人をやられしかば、東照宮三ヶ條の誓文を御所望有り。秀吉許諾して和平に及ばせ給ひけり。四月秀吉の妹濱松におはしまして、後に京に登らせ給ふべきむねを秀吉請ひて、秀吉の母の大政所を質とせられしかば、都に登らせ給ふべきに定まりけり。長臣共是れは危き事なり。然るべからざる由諫め申せども聞し召し入れ給はず。其の時申しけるは和平又破れ秀吉攻め來り候ふ共、素より鉾先の强きは言ふにや及び候ふべき。何十萬の大敵なりとも打ち負け候ふまじ。强ひて思し召し止まり給へと申しければ、東照宮聞し召し諫むる旨尤も理なり。されども秀吉に畏れて行くにはあらず。日本久しく兵亂にて四民安堵せず。此の頃やゝ治りたるに、復秀吉と弓箭をとらばいつの世にかは靜謐せん。只とく秀吉に對面して日本泰平の基とせん。若し危難に及びなんには、萬民の命に替はらんに何か惜しかるべきとて、九月廿日濱松を御首途有りけるに定りければ、人々廿

日は四ヶの惡日とて、千人出でて一人も不歸と申し傳へ候ふ。一日御延引然るべからんと申す。東照宮千人行きてこそ大事もあらめ。我れ今度一萬二千の軍兵を引き具し、上京す。此の軍兵一人も生きて歸らずば吾が爲めの大吉事なりとぞ仰せられける。井伊直政を御留守居とし、此の度秀吉詐を搆へ變に及ぶとも危からじ、尾張大納言信雄は必ず吾に告げ知らせて味方たるべし、丹羽五郎左衛門は秀吉に恨あれば心を合はせなん。其の外吾れに志を寄する人多し。去れども我れも亦其の備なからんや、秀吉不意に謀をなすならば、京都に火をかけ東寺に楯籠るべし、其の時素より立て置きたる汝が組一萬を五百づゝ二十に分ち、外に酒井・榊原が今度京に上る供の外留め置きたる兵一萬、是れも二十に分ち佐屋の渡を越え、千草を押し上るべし。若し大津にて支ふるならば、武田四郎が長篠にて懸かりし如く切つてかゝらば、上方武者一支もすべからず。又瀨田の橋を焚きたらば宇治より攻め入るべし。新七籠之介と云ふ角力取二人は、宇治の案內者なれば召し具すべし。斯くの如くならば秀吉聚樂を退きて大坂に引き取らん所を、東寺と清水と兩方より挾みて打ち破らんに恐るゝに足らず、秀吉詐妄の謀をなさば吾れ天下を掌に握るべき兆なりと仰せられ、御出馬有り。秀吉と御對面事故なく歸らせ給ひけり。されば危しとは知し召されけるが故に萬民の命に替はらんとの御詞、天地神明も感應して遂

に國運を永世にひらかせ給ひけるにこそ。

一六九　東照宮聚樂にて秀吉公に御對面の事

東照宮聚樂にて秀吉に御對面饗禮有りける日、秀吉白き紙子の羽織に繡したるを著られけり。

〔蒲生氏郷、其の頃四十二歳にて、狐紙子と名付け呼ばれしとなり。〕

淺野彈正長政彼の羽織を御所望候へかしと私語きければ、東照宮漫に人の物をもらひたる事なしと仰あり。長政又御所望候ひなば秀吉大に悦ばれ候ふべし。素此の羽織は物の具の上に著んとの設なれば、一旦は辭し申されんを强ひて乞ひ得させられなば、秀吉何事の悦か是れに增るべきとしひ申せば、東照宮止む事を得ずして許容ましましけり。偖て聚樂の城門にて毛利・浮田を始め居並びて拜謁しさて茶を奉りて後、東照宮彼の羽織の事を仰せ出だされしかば、秀吉悦びて手づから著せ奉り、扨大名に向ひ我れに物の具させまじとの事ならずや。誠に天の冥加に叶ひたる秀吉なりとぞ語られける。東照宮歸らせ給ひて後長臣達に聚樂の事ども御物がたりありける時、吾れに羽織を贈りて後、秀吉吾れに物の具させまじきとの志なりと諸大名に向ひて云はれしは、斯る後は爭でか秀吉の鉾先に向ふべきと

中國西國に語りつぎ言ひついで普く世人の口に有るべし、筑紫の末までも聞えなん、是れ天下の大名に威を示すの謀畧なり、其の遠大の謀覘く測るべきにあらず、力を以て是れを推さんとするとも及び難き秀吉なり、されども吾が志す所は別に有りとぞ仰せありける。

一七〇　本多正信遠謀言上の事

太閤東照宮を饗禮有りしに、かけ盤を始め器不殘葵の御紋を蒔繪にし、誠に美を盡したる次第なりしを、東照宮本多正信に語らせ給ひ、如何なる思慮や有らん、吾れも亦遠き慮有るべきなりと仰せられしかば、正信承りされば候ふ。小笠原與八郎氏次は、勇將の譽世上に聞え候ひて、たれたれも旗下につけばやと志有りしに、氏次同心仕らで御家の旗下仰せに從ひ候ひき。彼れが内々の志は信長と朝倉と一戰有らん時、必ず三河より御加勢に御出て有るべし。其の隙をうかゞひ御家の領國は已が掌の内に握らんと存じ候ひて、僞りて二心なき有樣に候ひき。彼れが計りし如く姉川の合戰信長援兵を乞はれしに、小笠原を先陣に命ぜられし故、心中に挾む所ありといへども、辭すべきやうなくて姉川にて御勝軍なりき。小笠原が二心なき體に見えしに、御乘りながら御心に乘せられぬ所有りし故、姉川

の先陣小笠原と御定め有りて彼が支度相違せり。人の乘する所をのらじとするも一物有つて候ふ。乘する處を乘りながら乘らぬ心あるを善しとす。豐臣家の乘する所を右の謀にてあへしらはせん事しかるべしと申しければ、東照宮尤もなりと深く信じ給はせけり。

一七一　東照宮伊豆にて北條父子に御對面の事

東照宮の御女を北條氏直迎へて兩國和平なれども、御對面なかりしかば、天正十四年三月使をもて拜謁して、要害國境の城々守りの兵を輟め候ふべし。黄瀨川を渡り伊豆に至るべきかと仰せ遣はされしに、酒井忠次黄瀨川を越え氏政父子に御對面候ひなば、北條家の旗下に屬し候ふと同じ事にて候ふ。今德川家は五州の御あるじなり。いかでか北條家の旗下に屬すべき。德川家の瑕なりと諫め申す。東照宮されば其の位爭ひ無益の事なり。過ぎし比武田・上杉和平して犀川を隔てて對面の時、馬より早く下りたる方旗下に似たりとて忽ち事破れ、其の場より鐵砲を打ち合ひ諸卒血に染みて相引にしたりき。其の時信玄廿七歳謙信十八歳の時なり。夫れより和平して京をさして上らんに、信長も吾れも爭ひか支へ得べき。其の故に兩方に使を以て道理至極せりといはせしかば、兩將廿四年の間和平せざり

き。其の中に信長は近江・和泉を打ち從へ、吾れも援を出だして信長を後にして、根を深くするの謀をせしが、信玄死して勝頼父に優るべきと威をふるひ、暴逆して滅亡したり。信長又勝頼に勝りて驕長し、樣々よからぬ事のみ有りて終に弑せられぬ。斯の如き大將は滅びて終をよくせざる事理なり。夫を見て戒とせず、位爭ひをするは惡しき事なり。氏政吾れと二心なく言ひかはさんに、兩旗にて東國を打ち平げなん。其の時に及んで州あまた領する者上座に在らん、位爭ひ更に益なき事なりとて、伊豆の三島にて氏政・氏直に御對面あり。

一七二　信長公平手政秀を惜しみ給ひし事

附　小瀨甫菴信長記太閤記を著しし事

信長弓箭盛にして畿内を打ち從へられし比、近習の者共諂ひて斯く强大に及ばせ給ふ事を知らで、平手中務が自害しけるは短慮にて候ふと申しけるを、信長怒つて色を變じ、吾れ斯く弓箭を取る事みな中務が諫めて死しけるに恥ぢ悔いて過を改めし故なり。古今に例なき中務を短慮なりといふ。汝等が志無下に口惜しき事なりと言はれけり。

〔小瀬甫菴後に蘆の事を傳へ聞きて、信長記を編まざる已前ならば必ず其の中に書き入るべき事を、遲く聞きて殘り多しと言ひけると也。中務大輔政秀は備後守より信長の傅に附けられたり。信長甚よからぬ事多かりしかば、度々諫め爭ひて後國の亡びん事を料りつゝ、一封の書を留め置きて自害して失せたる亦世に普く知りたれば具に記さず。中務始は清秀と云ひける故、諸書にはみな清秀と記したれども、後に政秀と改めける故、諫死の後信長尾州名古屋に一寺を建てられ政秀寺と稱し、寺領二百石寄附せられ、臨濟開山派京都妙心寺の末寺にて、中務の墓も其の寺に在り。寺の緣起に政秀葬送の時、信長柩に手を懸けられたるよし記せり。小瀬甫菴は町醫にて加州金澤に居り、利家の臣横山山城守長知の許に、心安く常に來て毎夜伽しけり。長知は尾州の人にて、織田家の事能く覺えたりし故、信長の事を甫菴毎夜尋れ問ひ、且つ秀吉の事をも問ひける故、長知或は委しく或はおろおろ語り聞かせけるを、甫菴退きて書き記し、信長記・太閤記二部の書を著し、世上へ出だしけるを、長知聞きて、信長・太閤のことを書き記さんために、尋れ問ひたらんには、答へんやうの有るべきに、遺漏も多く殘り多き事なり。其の事を聊もしらせざるに依りて只一座の物語に云ひ聞かせたるを其の儘に書き著したるは、今に於いて甚だ遺憾なり。甫菴馬

鹿者なりと長知いひきとなり。長知は初浪人にて叡山に寄宿し、諸國を武者修行して後前田家に仕へ、大膳と云ふ。加州大聖寺・小松、越中末森などの軍に、武功有りて一萬五千石領し、其の後同州太田但馬守を放討にせよとの命を受け、太田の緣一萬五千石を合はせて三萬石を與へらる。長知大功の人にて人の勇武をさのみ目に掛けず、大方の事を稱美もせず、只武士の有るべき事と心得たりし故、甫菴に語りたる事遺漏多くて悔みけるとぞ。〕

一七三　謙信信玄二將の批評

信玄死なれし事を深く隱したるに、北條氏政泄れ聞き謙信のもとに告げやられけり。謙信は春日山にて湯漬飯を食せられしが、是れをきゝ打ち驚きて箸を捨て飯を吐き出だし、英雄とは此の人なり、關東の弓箭柱を失ひたりとて惜しまれけり。信玄は將略の謙信に及ばざる故に、高野の成慶院にて大威德明王の法を修し謙信を呪詛せられし、其の文今に高野山に傳はりけりといふ。

〔信玄勇才は人に超えたりと稱すべし。親を逐ひ子を殺し降將を殺して其の子を妾とし、其の餘不仁怨怪算へ盡すべからず。姑く此の二事を併せ見ても、二將の賢否論をまたずして明なり。又甲

陽軍鑑に記せし處、附會詐僞しひて拵へ設けて、信玄の惡を隱し他を蔑にせし事、是れ又かぞへ盡すべからず。一事を擧げて論ずるに、北條家と戰ふごとに利有りと見えたれども、北條五代記に記せるは、信玄川中島に陣せしに、氏康夜討して甲州の兵敗北し、八幡と書きたる旗を捨てて逃げ入りたりと見えたり。甲陽軍鑑に是れを忌みて津浪に旗を取られしと記したり。たとへ北條五代記の說誤りたりといふとも、津浪に旗を取られしは戰所の地理にくらきにあらずや。〕

一七四　甲陽軍鑑虛妄多き事

甲陽軍鑑を高坂彈正著きたりと、世に傳ふる事久し。勝賴に仕へし友野大膳武功の人にて、甲州の滅びて後、引き籠り隱れ居しが、書きたる物には香坂としるせり。姓も違へり、僞妄多き書なりといへども、軍國の事情をよく書き取りたる故に、其の虛妄を人疑はず。控弦の家專ら讀むべきものと古人もいひしなり。然れども其の事實を案じ、其の眞僞を考へずば、大に惑はされんと必然なり。川中島九月十日の合戰の事、其の記せしによりて、是れを論ずるに、信玄の敗北たること疑ふべからず。卯の刻に始まりたるは越後方の勝、巳の刻に始まりたるは甲州の勝なりと記せり。軍は芝居を蹈へた

る方を以て勝とする事、甲陽軍鑑に論明白なり。然れども其の日の戰、信玄芝居を蹈へられしとはいふべからず。既に山本勘介が其の軍を豫めいひたりしも、二萬の兵を一萬二千、謙信の陣西條山へ指し向け合戰を始めなば、越後の軍勝つとも負くるとも、川を越え退かん所を、旗本組二萬を以て、首尾を打たんと謀りしなり。然れば謙信客戰なるが故に、思ふ程利を得たりとも、越後に引き返すは極りたる事なり。是れ主戰の敵に勝ちたればとて、空しく其の地にあるべきにあらざるを以てなり。是れを以ていへば、信玄芝居を蹈みたればとて、勝とはいふべからず。是れ一つ。又信玄芝居を蹈へたりともいひがたきにや。甘糟近江守犀川を渡りて三日留りたるを、甲州より押し寄せて、ここと能はざりき。是れ越後の軍芝居を蹈へたるにあらずや。是れ二つ。昔老人の物語に言ひ傳へし事あり。信玄嫡子義信を殺されしは、繼母の讒言ありしといへども、其の實は川中島にて、信玄義信將机換りをして、信玄は廣瀨の方へ引き退く。敗軍と云ひながら、義信を捨て殺すべき勢なりし故、義信深く恨みふくむを以て、終に不和に及んで、殺されしに至れりとなり。信玄其の場を蹈む事能はずして逃げたるを以て、芝居を蹈みたりといふべきや。是れ三つ。謙信素より甘糟をもて、川を渡るの後殿と定められしが、三日留りたるを以て見れば、甲陽軍鑑に、甘糟が兵散亂せしと記せるも、虛妄な

る事論を待たず。甘糟三日芝居を蹈みたるに、謙信何事に狼狽して、主從二人高梨山に懸りて走るべきや。謙信既に其の前夜軍評定ありしに計りし如くなる旨、甲陽軍鑑に記せし所明かなり。初の合戰に打ち勝つて、巳の刻まで徒に敵の歸り來るを待ちて敗走すべきや。謙信の弓箭をとれる越中の戰は、父の弔ひ合戰なり。信濃に師を出すは村上義清に賴まれて其の求めに應じて是れを救ふなり。相摸の軍は上杉憲政の來るを容れて、已む事を得ざるなり。既に其の詞にも、强ひて勝敗を見るにあらず。當る所の爲さで叶はざるの戰ひを爲すといへり。信義を守るを大將の慎むべき事にせり。爰を以て深く賴みたるは、始終約をかへず。又其の兵を用ふる信玄の及ぶべきにあらず。山の根の城を攻め落しに、信玄氏康兩旗にて、後援する事能はず。遙々と敵の中を旅行して、京都に赴きたるも、勝れたる事ならずや。信玄は謙信小田原へ攻め入りたる跡に付きてなしたるは、なし易きにあらずや。甲陽軍鑑に、長沼に城を築かれし時、判兵庫に信州水内郡にて百貫の地を與へ、信州戸隱にて密供を修す。爰に北越の輝虎謀臣を企て、此次きれて見えずとしるせり。永祿十一年謙信戸隱山にて、謙信を信玄咒詛直筆の書を見て打ち笑ひ、弓箭取る身の恥なり。末代の寶物にせよと、神職にいはれし由語り傳ふ。今其の書紀州高野山にありといふ事、詳かに書き記せる物あり。實は謙信を恐るる事虎の如しと

もいふべきにや。村上義清再び信州に歸り入りし事、甲陽軍鑑に載せずといへども、永祿年中、信州の中四郡謙信に屬し、義清を信州へ入れられし事記せるものあり。甲陽軍鑑に、長坂長閑、跡部大炊助二人を奸曲の臣として、勝賴寵せられし事を、深く慎れるは然る事なれども、二人權を取るは勝賴に始まれるにあらず、信玄の時より寵せられし故、勝賴に至りていよいよ權威ありき。信玄の時、北條の兵に跡部敗れ走りしを、皆寵愛を憎みし由を、甲陽軍鑑に載せたるを以て知るべきなり。又いひ傳へし說に、甲陽軍鑑を著しし本意は彈正にて筆取は猿樂彦十郎といふ者なり。彦十郎は甲州滅びて後、大久保忠隣の所にて、東照宮の御事を書き加へて、一書となしたるとなり。又或人の云ひしは、川中島合戰の事を前夜に論じて、謙信强敵たるの故、戮々の人數にてさへ危きに、まして信玄八千、謙信は一萬三千なり。勝つといふとも討死數多あるべしと、武田の各〻存ずるは理なりといひし事を甲陽軍鑑に載せたれば、勝は謙信にある事、分明なりと論ぜし人もありき。又同書に載せたる持氏生害、兩上杉ほこり恣にて、武州河越にて、北條に負けたるは天の罰なりといへり。持氏と兩上杉と時替れり。持氏の滅亡は永享十一年にて、氏康とは遙に百八年を隔てたるを同時に記せり。北條早雲は延德二年に相摸に打ち入りたり。其の頃上杉顯定は越後にあり。顯定は越後信濃の境、長森原にて

高梨に討たれぬ。早雲さへ兩上杉と斯くの如きを、氏康未だ生れざる巳前の事どもを、甲陽軍鑑に記しし事誤なり。天文六年丁酉七月十五日、管領朝定と北條氏綱と、武州川越にて夜軍あり。朝定討死なり。此の合戰を兩上杉と氏康夜軍となして記せるにや。同十五年丙午四月廿日、持氏五代の後古河晴氏と、管領上杉憲政と、共に川越にて氏康と合戰有つて、晴氏憲政敗北なり。是れを甲陽軍鑑に、兩上杉と氏康軍となり。されば五代巳前の持氏をば公方と記し、五代巳後の管領を兩上杉となせるなり。持氏四男成氏、成氏の長兄公方政氏なり。同人の長子高基、高基の長男晴氏なりといへり。又甲陽軍鑑に載する高名の事ども虛妄多し。中に就きて再拜を手に懸げてありし敵を討ち取りて、首を得し事を記せし事、幾ばくといふ事を知らず。惣じて甲州に敵せし士は、再拜を手に懸けしと見ゆ。誠に笑ふべき書の記しざまなり。其の餘虛妄勝げて計ふべからず。然れども其の時に居て、戰國の勢を能く知り且つ士の情に達せし者の書きたる書なる故、弓箭取る者の翫ぶべき書にて、虛妄を棄つべきにはあらず。

〔吾友の松崎惟時が語りけるは、其の師なりし寶山流の劍術の達人、武藤十右衛門の論せしに、戰には巧拙ありとおぼゆ。太閤秀吉は戰には拙きなり、小牧にて十萬に及ぶ兵を帥ゐて東照宮に對

陣し、誠に一双も合する事能はず。東照宮の御弓箭世に勝れさせ給へるは論にや及ぶ。然れども笑形原にて、甲州の兵と御一戰ありしに衆寡敵し難き故にや、利を失はせ給ひぬ。さらば信玄は海内無双ともいふべきに、謙信と軍する度毎に打ち負けられたり。是れを以て思ふに、戰の巧拙は遙かに其の科あるにや。然れども天下に旗を揚げ世を治め、國を平かにするの道は別に有つて、戰の巧拙にはよるべからずと語りしとぞ。是れ又奇論とすべし。〕

巻の八

一七五　仙石權兵衛九州に間者の事

秀吉島津を討たんとおもふ事年久し。天正十三年仙石權兵衛を商人の體にして九州に間者とし、山山浦々の地理悉く繪に書きて起臥に見、兵を分ち攻め入るべき道々を計られけり。

一七六　島津家久島原合戰の事　附惠藤某が事

島津中務大輔家久肥前に攻め入り、島原の城を攻め落したゝ所に、龍造寺隆信大軍にて押し寄せたり。家久わづかに三千許なりしを幾重ともなく取り圍む。家久是れを物ともせず、明日の合戰吾れ先陣すべし。貝を相圖に切りかゝるべしと定めて夜の明くるを待つ。朝霧ふかく物の色も分たず。家久將机に倚りてはれ間を待ち、やゝ朝日出で晴れたりしに、子の又七郎豐久十五歳になりけるを近付け、天晴武者振よ、只上帶の結びかくするものぞとて結び直し、脇指を抽いて其の端を切つて、後よく聞け若し軍に打ち勝つて打死せずば、此の上帶我れ解くべし。けふの軍に屍を戰場にさらさんに、島津が

家に生れたる者の思ひ切つたりと敵もしり、我れも黄泉に悅ばん物をといひもあへず、貝吹き立てさせ眞先に隆信の旗本へ切つてかゝる。島津家の弓箭は先駈の兵は矢一筋持たせ射放ちて、弓を捨て長き刀を抽いて切つてかゝる。けふも又しかしたりけり。隆信の旗本亂れ立つて敗北すれば、隆信きたなし返せと下知し、遂に蹈み止まり討死せられけり。家久勝つてほこらず人數をまとめ陣を整へける所に、龍造寺の臣惠藤それがし首一ッ血に染みたる刀に持ち添へ、大將は何處におはしまし候ふぞ。功名の印の候ふと云ひて家久に近付き寄り、首を投げ捨て馬の上なる家久を一太刀斬りたりしに、家久心疾く馬より飛び下りたれば、左の草摺を切りて餘る刀膝に當りけり。惠藤を中に取りこめて討たんとすれば、家久あたら者を討つなと下知しければ、生け捕らんとすれども、素よりけふを最後と思ひ定め切つて廻りし程に討たれけり。惠藤とのみいひて名をば名乘らず。家久惠藤が首を膝の上に置き並びなき剛の者、義勇の士とは是れをこそ言ふべけれ。生け捕りて對面し龍造寺に送り返さんと思ひしに、思ひ切つたる戰死せられしかば力及ばずとて、近所の僧を請じ、惠藤が弔ひの事念比に沙汰し、其の有樣詳に記して其の僧に賴み故郷にやられけり。偖て豐久を呼びて今朝の約のごとく、上帶を解きたりきとかや。家久は島津家の士大將なり。豐久後又中務と稱したり。關ヶ原に於いて義弘の

身に代り討死有りしは此の人なり。

一七七　立花道雪行狀の事

立花道雪
〔始戸次といふ。立花の跡を嗣ぎし故立花と稱す。始の名は鑑連、男子なく高橋紹運の子を養ひて嗣とす。〕

若かりし時雷に震たれ、足痿え歩行心に任せず、常に手輿に乘れり。累代大友家に屬す。大友家衰へけれども道雪心を變ぜず。武勇たくましき人にて、士卒を見る事子を愛するが如し。戰に臨む時は二尺七寸有りける刀と、種ヶ島の鐵砲を手輿に入れ、三尺許の棒に腕貫をして手に提げて乘られ、長き刀挿したる若き士百餘人手輿の左右に引き具し、軍始まれば手輿を此の士にかゝせ、棒を取りて手輿を叩き、えいとうと聲をあげ、此の輿を敵の眞中にかき入れよとて拍子取り、遲き時は輿の前後をたたかれけるに、敵に北げたるよりも恥として面もふらずかき入れければ、手輿の左右の士三尺餘りの刀を抽き連れて、一文字に切つてかゝりけるに、先陣の者どもすはや例の音頭よといひもあへず、我

れ先にと競ひかゝり、いかなる堅陣をも切り崩さずといふ事なし。若し先陣追つ立てらるゝ時は、道雪大音上げて我れを敵の中へ舁き入れよ、命惜しくば其の後逃げよと眼を見出だし下知せられしほどに、守り返して勝たざる事なし。斯かれば道雪の士は一日に幾度槍を合はせたりといふ者多し。又道雪常に士によわき者はなきものなり。若しよわき者あらば其の人の惡しきにあらで、其の大將の勵まさゞるの罪なり。吾が士はいふにや及ぶ。下部に至りても度々功名なきは非ず。他の家にて後れたる士あらば吾が方に來り仕へよ。取りかひて逸物にせん。吾が士の四月朔日左三兵衛は若き時初めて後れし事の有りしに、いつの頃よりか血臭き事にあひて次第に物に慣れ、今は五六人の剛の者と世にいはるゝぞかしとて、たまたま武功なき士のあれば、明き褻ぎの有るは武功の事よ。弱からざるは我れ見定めたり。明日にも軍に出でんに、人にそぞろかされ必ず拔け懸けして討死し給ふな。夫れは不忠なり。身を全うして道雪を見つぎ給はれ。各〻を打ち連れたればこそ、斯く年老いたる身の敵の眞中に有りて、ひるみたる色を見せざるぞと、最懇に睦ましくいひて酒酌みかはし、其の比はやりける武具取り出だして與へられければ、是れに勵まされて重れて軍のあらん時必ず人に後れじと勇みて、聊も武者ぶりの能く見ゆれば呼び出だして、あれ人々見給へ。此の道雪が見し所に違ふべきにあらずと

て、勝れたる剛の者の名を呼びて賴み候ふ程に、能く引き廻してよといひ、又人々の心を合はせらるる事、此の道雪は天の冥加に叶ひたる事よと勇め立て、若しわかき士の席上にて心得違ひたる事のある時は、客の前などに呼び出だし打ち笑ひ、道雪が士ふつゝかにこそあれ。されども軍に臨みて火花を散し候ふ。槍は此の人々こそ能くすれとて槍迫つ取りたるまれして譽められしかば、人々感じ涙を流し、此の人の爲に命を捨てんとはげみけり。

一七八　道雪仁愛深かりし事

道雪の側に仕ふる女に心をかよはす者ありけるを、志らぬ體にてぞ有りける。是れを志るもの有りて、ある夜物語の時申しけるは、東國の大將に誰れとは志らず候ふ。寵愛の女に密に情を通はす者の候ひしを誅せられきと、あらぬ事を態といひて道雪の答を試みけり。道雪打ち笑ひ若きものゝ色に迷ひたるは、必ずしも誅せずとも有りなん。人の上に居て君と仰がんには、假初の事に人を殺せば人背くもとゐよ、國の大法を犯したるに異なりとぞ語られける。彼の者傳へ聞いて心に愧ぢ又道雪の仁愛に感ず。其の後薩摩の軍船が嶽の城を攻むる時、道雪城を出でて戰ひしに、大軍押し懸かり危かりしに、彼の者大音上げ亂れける味方を恥ぢしめて散々に戰ひける。其のひまに道雪城ちかく引きとりたるに、敵猶きびしく進み來て、城門をたてあへぬ許なりければ、かの者取つて返し、武士の討死すべき所は爰にあり。各〻是れにて討死せば、城をば敵に奪はれじ。返せや人々といふまゝに、鎗を横たへ折りしきければ、返し合はする者三人あり。面もふらず戰ひて討死しける間に城門を閉ぢたりける。

一七九　稻葉一徹罪人を免さるゝ事

稻葉伊豫守一徹下人罪有りて死罪に行ふ時、聲を上げて泣く。命をしきかと云へば、彼の罪人いや命ををしみて泣くにあらず。命あれば一太刀恨むべきに斯く成り果つる事の口惜しくて泣くなりといふを、人々憎き奴哉、とうとう斬り棄てよとひしめくを伊豫守聞きて、それ助けよとて繩を解かせ、いかにもして我れに一太刀打てよとて追ひ放ちければ、然き由再三いひて立ち去りけり。其の後年經て一徹病重くなりし時、彼の下人來て力をつくしに本意を遂げずとて又泣く。頓て一徹死して彼の後、彼の下人一徹の墓に詣でて、吾れけふまでながらへたるは、君を一太刀恨み申すべしと申しし故なり、君隱れさせ給ひしに生きて居たらむには、刑死に及んで泣きしは命惜しきに泣きたるなり

と人の申さん事恥しく候ふとて、腹掻き切つて死しけり。是れを以て見るに戰國の時、上の人下の人共の情の太平無爲の化に浴したる時の人に異なるを思ひしるべきなり。

一八〇　高橋紹運討死の事　附立花統增薩摩に囚はるゝ事

島津義久・島津圖書忠長、伊集院右衞門大夫忠棟を大將として、兵五萬を以て筑前岩屋の城主高橋紹運を攻む。岩屋は要害の地にあらず。寶滿が嶽に楯籠りて防ぐべしといふ者有り。紹運爰を去りて寶滿が嶽に入りたればとて勝つべきにあらず、敵に恐れて逃げたりと誹られんも口惜し。此の城を墓に定めたりとてちつとも動かず。四方を圍みて嚴しく攻めたりけれども驚く色もなし。義久の士大將新納武藏守忠元矢留を乞ひて、城中に申すべき事の候ふと呼ばりければ、紹運聞きて何事にか候ふと問ふに新納申さけるは紹運の武勇世に名高しといへども、大友家に組せられ亡び衰へられん事近きにあり。大友家は切支丹を崇め、無道にして復家の興るべきに候はず。古き詞に一張一弛と申す事の候。疾義久と和平せられ候へといひければ、紹運聞きて斯く申すは高橋家にて、麻布外記と申す者にて候。只今承り候ふ旨紹運に申す程の事にも候はず。聊義の當れる所を申すべし。人々能く聞かれ候へ。凡

そ盛衰消長は時の運にて、古の細川・畠山・赤松・山名を始として今川・武田、近國にて尼子・大內等一度は盛にて、一度は衰へずといふ候はず。紹運今の限りに成りてよも冑を脫ぎて降參せうと存ずべきや。大友の家も右大將頼朝卿の時より子孫國を受け傳へぬれど、日向の軍に敗れしより貳心あるもの多く出で來て今かく衰へたり。されども今にも秀吉公大軍にて九州に渡らせ給ひ、薩摩に攻め入られんに、鹿兒島の破れん事も遠からじ。勢盡き運衰へぬるを見て、志を換ふるは弓箭取る身の恥辱にて、人に爪彈せらるべし。松壽千年終に朽つる事ぞかし。人生は朝露の日影を待つが如し。只永く世に殘らんものは義名に有りと覺え候ふ程に、降參は仕らじと高聲に呼ばはりければ、新納も又いふ事もなかりけり。外記とは名乘りけれども、紹運ならでかゝる詞たゝかひせん人やあると云ひあへり。かくて猶降參をすゝめて莊嚴寺の僧を使にしけれども聞き入れず。さらば攻めよとて天正十四年七月廿七日、四方より押し寄せ鬨の聲を作りかけ、えいえい聲を出だして攻めたりけり。城中には思ひ設けたることなれば、爰を限りに防ぎけれども終に打ち破られたり。三原紹心は「うつ太刀のかれのひびきは、久かたの天津空にも聞えあぐべき」と一首の歌を塀の柱に書き殘して討死す。弓削平內は强弓の手きゝなり。矢倉に上りさし詰め引きつめ箭種を惜しまず射伏せけるが、左の手に痛手を負ひ、

敵の中にかけ入りて討たれたり。高橋越前守・伊部九藏も聞ゆる弓の手だれにて、物具のさはやかなる敵を目にかけてあまた射倒し、矢種盡きければ、太刀の切先を揃へて討つて出で、散々に戰ひ一足も引かず討死しけり。尾山中務が子太郎次郎十六歳なるが、父と一所に死なんとて出でけるを、母袖を控へけるに振り切つて敵の中へかけ入り討死しけり。其の片袖母の手に殘りけるとなり。寄手も討たれし屍に四方の谷を埋みぬ。既に城兵殘り少くなりしかば、何しに猶踏留すべきとて討つて出で、をめき叫んで戰ひけるが、最期の軍よも人に笑はれじ。いざとて或は腹を切り、或は敵と引き組んで刺し違へ枕を並べて討死す。紹運は江淵右衛門大夫・三浦式部・黒岩隼人に、女童共皆刺し殺して敵の手にな懸けそと下知し、長刀打ち振り薙いで廻られしが、今は是れまでなりとて和歌を門の扉にとゞめられけり「かばれをば岩屋の苔に埋みてぞ雲ゐの空に名をとゞむべき」一説「ながれての末の世遠く埋もれぬ名をやいは屋の苔の下水」かくて行年三十九歳にて自害して失せられけり。士卒をあはれみ深く義厚かりしかば、救もなき城を守りて千八百人の士卒一人も逃げ散る者のなかりしは、例少き事なり。紹運始は鎭種と申しけり。

〔一説に、城中の婦人は悉く圍まるゝに先だちて、寶滿が嶽に入れられし故害にあはずといへり。

又紹運薩摩の軍をみ渡したるに、馬煙黑く押し來る。紹運人々に向ひ今押し來る敵六十巳下廿歳巳上の者共なるべし。今軍に打ち勝ちて吾が者共ことごとく討死すとも、彼の敵兵も又三四十年を過ぎずして野原の白骨となるべし。人生は朝露の日影を待つが如し。義名を萬世に殘しなん事武士の本意なりといはれしかば、城兵勇氣十倍せし勢を透さず、一陣に成りて薩兵を切り崩し、一人も殘らず討死すともいへり。又寄手の大將を島津家久なりともいへり。紹運の物具の引合に一封の書有り。島津中務殿と書きたれば、家久是れを讀むに、今度降參を勸めらるゝの諫に從はず、是れ義の故なり。別に一封の書を大友に送り屆け給はり候へとなり。中務類ひ稀なる勇將を殺しけるよ。此の人を友とせばいかばかり嬉しからんに惜しき事よ、弓箭取る身ほど恨めしきものはなしとて、僧を供養し葬禮を執り行ひ、壇を築きて、家久香を燒き再拜しければ、義を感ずる國風にて、薩摩武者皆燒香して涙を流し、紹運を稱美しけるといへり。又一說に、天正十四年六月島津圖書頭伊集院右衛門大夫兩先陣にて、筑後國高良山に押し入り、島津義久・同兵庫頭義弘は、肥後八代に旗本を陣し所々を燒き働す。筑紫廣門の方には兼れて懈りて有りしかば、俄に騷ぎ立ち防戰の備すべき樣もなし。七月十日薩州の軍筑後川を渉り、其の明の日廣門の館を取り

圍み廣門を虜りたり。同月十三日先陣の兩將太宰府觀世音寺に着陣す。其の外龍造寺政家・秋月種實を始として相加はり十萬餘に及べり。岩屋の麓築山・横岳・二日市・太宰府のあたり、尺すも透間なく陣し、兩將より莊嚴寺の僧を使として、此の度太宰府に攻めよせ候ふは、紹運に對し弓箭取るべきにあらず候ふ。筑紫廣門二心あるにより是れを討つべき爲にて、既に廣門を生け捕りぬ。寶滿が獄に紹運の實子を置かれ候うて、堅く守らせられ候ふ事謂なきに似たり。とくとく寶滿を渡され候へとぞ云ひ送りける。紹運承り候ひぬ。素より一言の仰なく、押して大軍を以て某が守り候ふ城下を馬蹄に蹴散らされ候ふ事、弓箭の禮に非ずと申すべし。扨て紫虎も寶滿の家を稱して立花と稱す紹運も今に有りては關白秀吉に屬し候へば、寶滿も岩屋も關白の城にて候ふを、渡し參らする事存じもよらず候ふとの答を、使僧歸つて云ひければ、とても弱々と城を渡すべき紹運にあらず。さらば圍むべしとて、諸手口々の攻手を定め、七月十四日より柵をふり、矢合を始めたり。されども城中堅く守りてひるめる體もなく、未申の方尾山中務が持口より、鐵砲弩弓をもて、城へ攻め寄せたる寄手に打ち懸け、數百人打ち殺し手負は數をしらず。或時嶺の手の寄手より矢留を乞ひて、新納藏人と申す者にて候ふ、紹運公に申すべき事候ふといへば、紹運麻布外記と名乘りて詞戰

ひに及べり。藏人詞を盡し利害を說き、大友殿には切支丹の宗門を尊信有りて、神明佛法を蔑にし、天道に背かれし故、人心散々に成り滅亡近きに候ふとて、島津に屬せられ候ふやうに申し給はらんやといへども、紹運節義を說きて屈服の色なく、來春は關白九州へ軍を出ださるべく候ふ。さらば島津家の存亡も計るべからず。主の盛なる時は忠を致し、衰へたる時も操を替へざるを以て、弓箭取る身の道とす。各遠島津家滅亡の時に臨んで躬を隱す謀を廻され候へ。只今おびたゞしく目に餘る十萬の士卒も、百年の齡を保つべきか。斯る心も候ひなんには士の義たる道をこそ存ぜらるべけれと答へて、降るべき事は思ひもよらず。兩將重れて莊嚴寺の僧を使として、八ヶ國の軍兵を引き受け、堅固に城を守らるゝ事廿日に及べり。紹運公の武勇九州に無双たるべし。寶滿・立花・岩屋とも仔細候ふまじ。和談を取り結び兵を返し圍を卷きほぐし申すべし。然れども十萬の軍兵の覺にて候ふ間人質を一人賜はりなんや。さらば此の程大友島津和談は、紹運公の心に有るべし。事なりたらんには其の時人質を返し、九州一統島津に屬しなん。其の後中國に押し渡り、島津家天下に旗を立て候ふべしと云ひ送りしかば、紹運許容せず。人質を關白か大友家に出ださん事はさも有りなん。秋月種實龍造寺に組みし、夫れより一同に九州の亂に及べる根

本の人なれば、秋月に腹切らせ、薩州の兩將より、今度の弓箭は京都又豐州への遺恨にあらず。筑紫廣門が反心を糺明せんためなりと、神文を書きて賜はり候ひなば、紹運事よく計り候ふべし。然らずば此の城を以て墓所とすと答へられしかば、和平も事遂げず。遂に七月廿七日に諸軍一同に押し寄せて、卯の刻より軍始まりて午の刻の終迄、寄手大軍入れ替へ〳〵攻めたりけるに、手負討死いふべからず。去れども死骸を蹈み越え息をも繼がせず攻め戰ふ。けふを限りと思ひ切つたる城兵、各〻持口を一足も引かず切死にしたりければ城陷りぬ。紹運の左右には、名を得たる剛の者共五十人斗に討ちなされたるが、後度の勝負をも思はゞこそ、今を最期の軍なれば、當るを幸ひに向ふ敵に切先を揃へて討つて懸かり、一陣二陣を遙の谷底へまくり落しければ、半時許は攻め入り得ざりけり。紹運手負討死の士卒を見めぐりて、死にたる者には無二の忠節謝するに詞なしと一禮し、息の通へる者には自ら氣付の藥を口に入れらる。かゝる際に及んで軍兵に愛を盡されける有樣、されば數年城を守り度々の軍に功を顯はし、今度は萬に一ッ運を開くべきにあらざる大敵の圍に、士卒一人も落ち散らざりし類なき事よといひあへり。其の後紹運薙刀を提げ思ふ程戰ひて、辭世の和歌を扉に書き付け、三十九歳にて腹を切られしかば、寄手攻め入りて、

敵ながら斯かる大將も又有るべきや。士卒一人も降參せず逃げ散る事なかりしを惜しまぬ人ぞなかりける。內室を始め刺し殺すに暇なくてとらはれとなりけれども、深く寄手もいたはり養育しけるとぞ。統增此の時寶滿が嶽に有り。薩摩の兩將使を以て城を渡されよと云ひ送る。統增今年十五歳なり。城中以ての外軍兵少く、防ぎ戰ふべき事思ひもよらず。秀吉の出師を待ち受くべき間、しばらく生き延びて時を窺ふにしかずと相謀り、統增を立花に送り届け給はりなんには和平すべし、然らずば城を枕に切死すべきと答へければ、兩將より仔細あらじと許諾し、神文を書きて送りしが、俄に約を變じたばかりて立花に送り返さず。其の後肥後の吉松といふ所に移し番兵を付け置きたり。紹運の內室は筑後の北の關といふ所に移し置き、偖て立花へ使を以て降參せられんやと言ひ送る。統虎實父にて候ふ紹運は關白の爲に自害を遂げ候ひき。我れ又紹運の爲に自害を遂ぐべしとて、軍兵を寄せられよ此の城の切り岸にて箭一ッ仕らんと答へられけり。かゝる處に八代に陣せられし義久より兩將に下知し、秀吉師を出だして打ち向はるゝ由云ひふらせり。疾く兵を返すべしとありければ、八月廿四日兩將太宰府を引き拂ひぬ。統虎陣を押し出だし、高取の城を攻め落し、城主星野中務大輔兄弟を始め悉く討ち取り、それより岩屋に向はるゝ所に、

立花の内小野理右衛門といへる者忍び入りて火を懸けたりしかば、あわてさわぎ一支もなく逃げ落ちけり。秀吉感狀を賜はり、大に稱せらる。統虎又密に龍造寺に北の關に押し込められし母を奪ひ取り給はらんやと賴まれしに、龍造寺も薩州と弓箭を取るべき志ありしかば、心得候ふとて堀江覺仙といへる者に軍兵數多指し添へて、北の關に押し寄せ薩州の番の者を追ひちらし、紹運の後室を奪ひ取り頓て立花へ送り届けたり。後室此の比は法名を宗雲といひきとぞ。かくて薩州には統增を八代へ移し、高津加の法華寺に置きて、警護の兵に嚴しく守らせたれば、附き添ひたる者共さまざまに謀を廻らせども、本國とは遠ざかりぬ。謀もすべき術なく日を送りけるに、尙心許なくや有りけん。薩州に移し下堂院と云ふ所に置きけり。秀吉九州へ渡海し、先陣薩州千盞まで進まれしかば、統虎使を以て統增を渡し給はらんやと義久の陣へ云ひ送られければ、義久仔細に及ばずして返し參らすべきよし答に及びしかば、十時攝津守を迎として下堂院に遣し、付き添ひたる面々も殘なく引き取り、千盞へ行く道海邊を過ぎけるに、秀吉の軍兵船を掛け並べ居たるが、落人と見て餘すなとて小船にのり、ひたひたと陸に上り取り圍まんとす。十時勝れて賢き者にて、邊りに有りける小船をかり本船に漕ぎよせ、統增なる事を斷りければ、大將と覺しき者

船屋形に上り、采配を取つて諸卒に下知し靜めければ、虎口を遁れて千盞に着き、兄統虎の陣に入りて對面せられけり。此の統虎は後に左近將監宗茂とて曉勇無双の大將なり。過ぎにし天正十年十月六日秋月と道雲・紹運、宇龍野にて軍有りし時、紹運自ら薙刀をとり烈しく戰はれしに、統虎十六歳にて初陣なりし。其の器量を見て、道雲嫡子にして家を嗣がすべき事を紹運に乞うて、吾が子にせられきとぞ。〕

一八一　紹運齋藤鎭實の妹を娶られし事

紹運若き時彌七郎といひし比、兄の鑑理齋藤鎭實の妹を彌七郎に娶せられよと約束せられけり。其の砌豐前中國と軍有りて、殊に騷しくて迎へ取らずして打ち過ぎぬ。其の後彌七郎鎭實に對面の折から、兄が申しかはしし如く迎へ取るべきに、軍の最中にて斯くは遲はり候ふ。頓て迎へ申さんと語られしに、鎭實げにげに申しかはししは可レ忘も候はねど、其の後妹は痘瘡を煩ひて以ての外にみ苦しくなりぬ。中々かれが有樣にて見屆けらるべきにあらず。今にては參らせん事叶ひ難しといひし時、彌七郎色をかへ、夫れは存じも寄らざる仰を承りぬるなり。齋藤家は先祖大友家にて、武勇たくまし

き弓取にておはすれば、兄にて候ふものゝ迎へ申さんと約束しつる事に候ふ、夫に辭退も候ふまじ。我れ少しも色を好む心に候はずとて頓て婚禮あり。其の腹に二人の男子出來にけり。此の迎へとりし頃紹巴二十歳に及びたりきとかや。

一八二　志賀親次山海が峯に兵を伏する事

島津義久大友を攻め、所々に亂れ入る。志賀太郎親次獨義久に降らず。義久松の尾の城に在りて秀吉大軍にて九州に渡らると聞きて、薩州に引き退く。親次大に悅び、嶮岨の地に兵を伏せて打ち破るべしとて鐵砲の手利廿人撰み出だし、山海が嶺の林に待たせけり。然る處に首藤五郎大夫・堀八郎といふ者、此の度の選に殘りけるを口惜しき事におもひ、密に道に隱れて、薩摩武者二騎打ち落してけり。扨ては伏兵有るぞといふ程こそあれ、大軍林に入り、草を分けてさがしければ、二十人の者ども、力なく藥を惜しまず、散々に打ちかけ、追ひくる者共打ち殺して引き退く。親次大息ついで義久をば山海が嶺は越さすまじき物を、天の祐に逢ひたる義久なりと云はれけり。

一八三　高畑三河功名の事

豐後國合志常陸介を大友義鎭攻むる時、佐伯紀伊守（一說に彈正少弼）惟教大將たり。佐伯が士大將高畑三河一日に十三度の功名あり。其の後人問うて、僅に鎗刀一兩度迫り合ひても大に疲れ、息切れて小兒にも負くべきに、一日十三度の功名は假令志は飽くまで剛なりとも、力も息も續きぬるこそいぶかしけれといふ。高畑聞きて打ち笑ひ、別の子細もなき事なり。我れ戰場に打ち臨みて勿論の事とはいひながら、死生存亡の間に於て少しの思案を費すべき事なし。さる故に人は騷がしくても我れは靜なり。大方は鎗を合はせ、太刀を打ちちがへざる已前に力を出だし氣を張るならん、是れに依りて精神草臥れ疲れたるならん。我れ敵に逢ふ時は、我が首を敵にとらするか、敵の首を我れ取るか、此の二ッの中天命に有りとおもひて、初は綴きに似たれども、打ち合ふ時一決して一鎗の中に勝負分る故に、疲るゝ事なく候ふなり。不入處にて氣を苦しめざるゆゑ、幾度事に逢ひても胸中安閑なりと答へけりとぞ。

一八四　森迫親正討死辭世の事

同じ城攻に佐伯に屬したる森迫（一本關に作る）三十郎親正、首を取り又戰ひて討死す。時に十七歳なり。常陸介が從兵山本十郎といふ者其の首をとる。小鍬形三本菖蒲の兜なり。短冊を付けたり。

命より名こそをしけれ武士の道にかふべきみちしなければ

常陸介感じて、其の首死屍を高畑が許に送り歸しけり。親正は豐後大野郡三重郷の人なり。

一八五　薩摩勢根白の砦を攻むる事

天正十五年二月秀吉島津を討たるゝ時、大和大納言秀長・近江中納言秀次八萬餘、島津が豐後府内より薩摩へ引き退く後を追うて亂れ入り、高城・曽部の城を取り圍み、附城五十一ヶ所築きたり。中にも耳川を越えて根白の砦には、宮部善祥坊繼潤・木下平大夫貞基・龜井新十郎廣政・熊屋隱岐守光成・福原右馬助直高一萬餘にて守りけり。是れは島津が後卷を防がん爲なり。頃は四月十七日の朝、島津使を根白にたて高城の城を渡すべし。士卒を助け給はり候へと言ひ送りければ、宮部五十丁隔たる秀次へ

此の旨申して後、兎角の返答を申さんとて使を返して後、斯く欺きて怠らせ思ひもよらぬ所へ寄すべき謀なり。其の用意せよとて人夫千人餘に山々の竹木を伐らせ、陣の前に深さ二間廣さ三間許のから堀をかまへ、柵木を結ひて我れも我れもと物具して待つ所に、物聞に出だしたる者ども走り歸り、敵押し寄せ候ふと言ひも果てぬに、義弘一萬六千餘の兵を率ゐ、鬨を揚げて攻め寄せたり。宮部木戸口に進み出で一番鎗と名乘りて相戰ふ。田中九介・其の子彦六・國友半右衛門・三村三郎右衛門を始め、大剛の兵ども先を爭ひて切つて出で相戰ふ。義弘も義久の子にて素より聞ゆる勇將なり。薙刀を提げ眞先かけて只今此の城蹈み破れ者共と呼はり、多勢堀を越え冑の鍬を傾け、蟻の如く柵の木に付きて引き破らんとする時、乘れて巧みたれば控への綱を斷ちて、柵を堀の中へ倒ししかば、薩摩武者討たるる者八百餘人に及べり。義弘愈怒り進んで屍を蹈み越えて內の柵に攻め寄せ、透間もなく戰ひけるが、內の柵をも打ち破り、十八日の朝三の丸を攻め取つたり。宮部を始め愈〻死地に入りたれば、爰を限りと防ぎ戰ふ。斯かりしかば秀長三萬許にて耳川に打ち向ひ、根白の方を見渡せば薩摩の軍兵雲の如く取り卷きて、鐵炮の音鬨の聲矢叫び相交り天地も動く許なり。川を渡らんと進まれけるに、尾藤左衛門尉知宣秀長の馬の轡を取つて、義弘が鋒、武田四郎が長篠の掛り口に似たり。關白秀吉もかな

はせ給ふべからずと強ひて留めければ、既に川へ打ち入れたる馬を控へて進み得ず。藤堂高虎は手兵を率ゐ川を渡し、搦手より根白にかけ入り、自ら鎗おつとり、敵數多突き伏せて宮部に力を合はせけり。黑田孝隆・同長政も手の者を引き分け進み行き、道より村上彦右衛門と云ふ剛の者を遣はして、唯今秀長六萬の兵にて、後卷せられ候ふと呼ばはらせければ、宮部を始め大に勇み悦べり。長政の士栗山・後藤川を渉り義弘の陣に切つてかゝる。秀長の士大將羽根田長門守七千許の兵にて黑田父子に劣らじと鎗を打ち入れ攻め戰ふ。小早川隆景三千許にて耳川に來る。秀長今敵陣にかゝるべきと存ずれども、人々同心せられず。如何すべきと問はれども、隆景冷笑ひて物をいはず。かかる所に非上伯耆就遠・浦兵部宗勝、古き背破の物具着て進み出て、島津はけふの客人なり。訪ひ來るに出で迎はずば弓箭の禮儀に違ふべし。軍評定と申す事や候ふと秀長を嘲りけれども、進むけしきのなかりければ、隆景馬を打ち入れて川を渡り、敵の後陣を取り切らんと進まれければ、是れより薩摩の軍亂れて、敗北しければ、義弘の從子三郎忠親蹈み止まりて討死しけり。黑田小早川使を秀長の陣へ遣して、味方は八萬に餘れり。鐵炮三千許左右の嶺を取り切り打ち立つる程ならば、義弘を打ち取らん事掌の中にありと申されけれども、知宣堅く留めて進はざりしかば、義弘敗軍の士卒を集め所々に火をかけ引き

取つたり。後れたる士卒五十餘人戰ひ疲れたるを生け捕りて引き來る。助けて歸さんいかにといへば是れ見られよ、生きて又歸らじと紙に書きて髻に結ひ付けて候ふぞ、疾く首を刎れられ候へとて皆殺されけり。薩摩の人の勇氣こそゆゝしけれ。秀吉宮部には日本無双といふ感狀を與へ、尾藤は領國讃州を召し放されけるとかや。

一八六　巖石の城合戰坂小坂先登の事

秀吉島津を伐たるゝ時、蒲生氏郷・前田利長・巖石の城を攻めらるゝに、氏郷の先陣蒲生源左衛門、此の頃は坂小坂といひけるが、眞先に進んでかなにていちばんと墨黑に書きたる白き吹貫を、門の眞中に押し立て、をめきさけんで相戰ふ。雨の降る如く鐵砲を打ち出だせば、吹貫は芭蕉の秋風に破れたるが如し。大音上げて一足も引くな者共と下知し、面もふらず攻め入りけるを、後陣より是れぞ昭ゆる蒲生が内の士大將小坂といへる大剛の者よと口々にぞ譽めたりける。寺島美濃守此の頃は半左衛門といひけるが、是れは黑き吹貫おし立て坂に續きたり。利長の士松原久兵衛を始として先を爭ひ攻め入り、終に城を攻め落して首四百餘打ち取りたり。秀吉氏郷に感狀を與へられ、小坂に金錢十四羽

識を賜はりぬ。

〔一説に、小坂を一番と記せり。秀吉坂を賞して刀を與へられけるに、坂申しけるは一番の賞にて候へば栗田其の一人なり。栗田は黒き吹貫にて候ひき。坂が吹貫白くて目に立ち申したるなるべしと譲りければ、秀吉愈〻大に感じ、栗田に與へらるともいへり。〕

一八七　野矢甚右衛門功名の事

野矢甚右衛門は敵五人討ち取り、首五つ提げて氏郷の前に來る。氏郷たやすくも首多く取りたるかな如何してと問はるゝに、敵の太刀先左の腕に當ると存じ候ふ時射出だせば、中らぬ矢はなきものなりとぞ申しける。

一八八　秋月種長降參の事

秀吉島津を伐たるゝ時、秋月種長小熊の城を出で、秀吉の陣に至り降參しければ、秀吉對面降參の禮を受けて後更に心おく事なし。家に傳はりたる楢柴の茶入とて名高き物有るとこそ聞け。天晴一日見ばやと問はれしに、種長速に取り來り候ふべしと云ふ。秀吉さらば使を以て取り寄せよとて、秋月の從者を返してかの茶入を取り來る。秀吉見て聞きしに優れる物なり。家の寶なれども我れに得させてんやと懇にいはれしかば、種長既に兜を脱いで參り候ふ上は何條をしむべきやうの候ふべきと申す。秀吉殊に悦ばれ、久しく我が陣所に在つて、軍兵ども怪しみ危むべきよ、疾く歸れ我れを防ぎしは弓箭取る身のならひなり。降參の上は吾が恨み露も不殘領地本のごとくなるべしといはれしかば、種長悦びて馳せ歸る。種長が士卒若し秀吉種長を害せらるゝならば、秀吉の陣にかけ入り切死にせんとおもひ定めて居たりけるに、歸りて委しく秀吉の詞茶入を乞はれし有樣を語りければ、皆思ひもよらぬ事よといひあへり。かくと聞き傳へて九州の敵多く戰はずして降參せり。

一八九　新納武藏守剛氣の事

新納武藏守忠元は島津家の士大將なり。勇名をもて指を折る時第一なりとて、大指武藏と稱しけり。義久秀吉に降參の時、新納は肥後の堺泉の城にあり。（一説に大口と有り）日本の軍を引き受け一戰をせずして降參せんは弓箭の無禮なり。疾く陣を寄せさせ給へ一軍して討死仕らんとぞ申し送りける。秀吉頓て師を

城下に進めらるゝに、かの城の路三四里が程は、馬の鞍をおろし靫の紐を解くばかりの嶮難にて、輙く打ち入りがたし。武藏守暫く支へて後（一説に義久斯くと聞きて大に驚き疾く降參せよと下知せられきといへり）今は是までなり。主君既に降參せし上は家臣の身として爭てその心に背かんや、弓箭の禮儀をもてかく申したるにて候へ。日本の軍を城に引き受くる事、士の一面目にて候ふとて城を出でにけり。

〔一説に、島津降參の後、鹿兒島の外の城々は壞つべき旨秀吉下知せられしに、新納は城に籠り專ら防戰の手段をなし、其の身も病と稱して引き籠り居たりしに、秀吉聞かぬ體にして歸京ありけり。其の後島津上京し武藏守も供したりしに、程經て秀吉何とて新納が城をば壞ち捨てず、合戰の設したるや怪しき事なりと問はれしに、武藏守人々の答を待たず進み出で、仰せ出だされし旨義久下知せしかども、承り入れずして軍を志し居たりしに、踏み過ぎて通らせ給ひしこそ恐多く候へども恨しく存じ候へ。其の子細は城を開く事も古より其の例なき事に非ず。只今日本の主と世に稱し申し候ふ關白樣はるかに筑紫のはてまで引き出だし奉り、鹿兒島に申し請け候ふ事は、島津が家の譽とや申さん。新納の城を破り棄てずば惡き奴め踏み潰せとて、軍兵を向けられんは必定なり。其の時一戰仕らば關白の御馬を向けさせられたる城なりと末代迄も申し傳へなんには

子孫の面目是れに過ぎたる事や候ふべき。討つて出て火花を散らし一足も引かず討死したりとも、是れ又武名とや申すべき、敵に箭一筋も射かけずして、城を破り捨て候ふ事口惜しく候ひき。新納は日向口に在りて、宮部善祥坊を始として先陣の人々に迫り合ひたりしに、島津降參のよし告げ來り引き返し候ひぬ。島津が兵を以て日本國の大軍を引き受け、合戰始終の勝利を計るべきには候はれども、新納肥後口を防ぎたらんには地は嶮なり。關白殿下いかに智謀たくましくおはしまし候ふとも、輒く攻め入り給はん事は思ひもよらざる事なり。嶺々谷々より種ヶ島の鐵砲を打ちかけ、思ひのまゝに先陣を打ちなやまし申すべきに、今に至りて殘念なる事ゞもなりと恐るゝ所なく申しけるを、秀吉聞きて新納は聞き及びたる勇將なりとて、大言の咎は更になかりけり。〕

卷の九

一九〇　黑田家岐井谷合戰の事　竝小川傳右衛門野村太郎兵衛岐井友房を斬る事

秀吉黑田勘解由孝隆に豐前國を與へられしに一揆處々に起る。中にも岐井谷友房はもと下野國宇都宮彌三郎友綱が次男、鎌倉の北より地を領したる子孫なり。毛利豐岐守勝信に誘かれ、地士をかり催し民屋に放火す。黑田父子は馬の岳といふ城に在りけるを城下に押し寄す。長政其の時十六歲岐井を討つべきと勇まれけれども、孝隆同心せられず。長政其の頃は吉兵衛といひけるが、若士ども引き具し切つて出づれば、一揆ども一支もせず敗北するを追つかけたり。岐井は山中の嶮路にそびき入れ、多くの大石の陰に逃げ隱れたり。大野小辨といふ若武者眞先に進みたるを、一揆起り合はせ七八人取り卷きて馬より突き落したり。後藤又兵衛・小河傳右衛門・久野四兵衛馬の首を引き返し敗北しけれども、長政の馬廻りは眞丸になつて、一揆勝に乘り押し詰めけれども鎗を合はす、一揆は木陰谷かげより五人十人かけ出で、狩場の鹿を射るごとく、竹の鏃の矢にて雨の降る樣に射たりけり。長政馬より下り立ち討死すべき色なりしを、近習の者共馬に搔き乘せ退きければ、一揆類に追つかけけり。長政の馬矢に中りしかば、爰にて自害せんと冒はれしを、菅六之介政利己が馬に召され候へといへども聞き入れず、早上帶を解かんとせられけるを三宅三大夫後に若狹走り寄り、大將の自害の所にては候はずとてかき抱き馬に打ちのせ、片手に馬を牽き片手に長政をとらへて、我等生き殘りたるに殿を追ひ討つとや念もなく候ふ。地の利を見て引き返し一揆の奴原追ひ崩し申さんとて引き退く。菅は長政の鞦の組違ひに手をかけて少しも離れず。木屋兵右衛門は長政の鎗を持つて歩立にて續きたり。一揆長政と見知り餘さじと付け慕ふ。三宅・菅・木屋を始として、岡本彌兵衛・小河久大夫・坂本七左衛門已下五十人許丸く成りて、思ひ切りたる色を見て靜に詰め寄せて、二里許追つかけしが、其の後は慕はざりけり。後藤はいかゞしたりけん。猩々緋の羽織を脫ぎ捨てたりしを長政とらせ歸られけり。

〔後藤度々の武功有りて、一萬四千石與へ小隈の城にありしが、後に岐井谷の軍物語に及べば俄に病み出できとぞ。　木屋兵右衛門は長政に向ひ、後藤・小河が有りさま大臆病の男にて候ふを、親子共に取り分けて懇にせさせ給ひ候ふ。此の兵右衛門は、誠にあるにもあらぬ體に候へども、敵

追つ詰め來りなば、一番に討死して御目にかけ候ふべし。さてもさても歎かはしき御眼力やとあくまで罵りて退きけり。其の後長政筑前を賜はりしに、小祿の士皆祿を增したりしに、兵右衛門は六百石に鐵砲の者二十人司れり。さのみ賞美なかりしかば、人々木屋に殿を岐井谷にて罵りたる事をれたく殿は思し召して、斯くは有るならんといへば、木屋我れも左思ふ事よ。此の憤ならば首をも刎れられなんとおもへどもさもあらず、是れより後も軍あらば度ごとに大言を吐きちらし、只今寵愛にほこる奴原の中に、武者振の惡しき者あらば、恥を與へん事我が思ひ出なりといひければ、聞く者汝は下部のいはゆる口に倒されるなるべしと諫めければ、今の祿を削らるゝとも口はきゝたき事よとて笑ひけりとぞ。〕

孝隆は馬の岳の矢倉に上り、長政の敗軍を見て笑ひ居られしかば、側より危く候ふ疾く加勢をせさせ給へと口々にいひけれども、いやいや引きおくれたる味方の眞丸になり、靜々と道を引き退くは吉兵衛なるべし。危ふげもなしといはれしが果して長政事故なく引き返されたり。長政敗軍を口惜しとて引きこもり、夜の物打ち被ぎて臥し居たり。孝隆物主を呼びて弱敵をば恐れよ。初の勝を勝にするものなり。勝すぐれば必ず敗の本なりと戒められけり。鹽屋善七郎といふ侍長政の近習に仕へしが、京

に使に行き此の日の暮頃に歸りて長政の寢所に行き、けふの敗軍是非もなき事に候ふ。さ許りの者共給ふや、父祖の高名に瑕付き申すこそ口惜しけれ。善七郎が御馬の傍に在るならば、鎗を合はせ一揆の奴原追ひ立て引き取るべきに、後藤めらきたなき振舞に候はずや。重れて一揆と軍あらんに必死と思し召し定められよとて坐を立ちければ、長政も髻をはらひ思ひ切つたる體なり。翌日善七郎又申しけるは、あながち口惜しとな思し召され候ひそ。一揆押し寄せ候はゞ眞先かけて切り崩し恥を雪ぎ給へ。善七郎は御馬の先にて討死せん。逃げたる奴原も勵まされて軍する程ならば、鬼神なりとも恐るゝに足ずと云ひ慰めければ、長政起き上り物語せられけり。長政は面目なしとて父の前に出でず。孝隆扨ては必死を期したるなりと察し、老功の者餘多長政に差し添へてはやりたる下知を禁ぜられけり。一揆又上毛郡へ押し寄せければ、長政火隈の海近き所の山に上り待ちかけて思ふ圖に引き受け、一同に乘り出だし馬のかけ場よかりければ、縱横に乘り割り、一揆敗軍する處を追ひ立てたり。鬼木・鹽田などいふ者討たれ散々になりけるを、長政鹽田内記を手づから討ち取り、尙も追ひかけんとせられしを、老臣共馬より飛び下り押へて整へけり。鹽屋善七郎は敵の中に乘り入り、鬼木掃部が首を取

り、右の方を見れば長政敵の首を取りしかば、又馬引き寄せて打ち乘り追ひ詰めて首二ッ取りしが、痛手負ひて精神も亂れたるが、尙も若殿の功名を問ひ聞きて、嬉しや先日の恥辱を雪がせ給ひぬ。此の上はおもひ殘く事なしと云ひけり。長政善七郎が枕元に居よられしかば、長政の手をとり、此の後能く心得給へ。殿に討死し給へと申す者はなき事に候ふといへば、長政涙を流し汝を先だつる事の殘り多さよと咽ばるれば、善七眼を見開き、先の頃諫め申しは必死をおもひ定めたるゆゑに候ふ。今度の功名こそめでたけれ。今生の御目見只今を限りなり。人は一代名は末代と申す事の候ふといひも終らず空しくなりけるとぞ。比類なき者なりと云ひあへり。翌日孝隆火隈に來りて對面し、若き者は懲るる事なくては思慮の練れぬものぞかし。終の勝を計れ只勝つべきとのみ思へば敗を取るなり。其將は時により緩に見ゆれども、卒爾の軍はせざる故に、終の勝を全うするよと敎へられぬ。長政又押し寄せんと云はれしを、孝隆制して要害を設け、兵粮の道を塞ぎ馬の岳に歸られけり。斯くて一揆勢ひ盡きければ、毛利輝元を賴み和平しけれども友房は病とて出でず。中津川より三宅三大夫、岐非谷より傳法寺兵部、使者往來して互に物語しけるに、或時三宅言ひけるは友房内室なしと聞き、拙解由に妹あり婚禮あらばいかにと云ふ。傳法寺夫れは悅ばしき事なり。能く計らはれんやといふに、三宅

われ年若ければ老人と相計りてこそといひけり、傳法寺は敵の妹を人質に取らんは然るべしとや思ひけん。わりなく三宅に賴みけり。三宅我れ主君の心をもしらで容易にも申し出でたる哉。事調はずば面目も候はずなどいひて、長政に斯くと告げて、孝隆にも告げ遣りしかば密謀をなし、三宅に孝隆書を與へ緣を結ぶは末賴母しき事なれども、例の麁忽ならんとぞ書かれける。三宅傳法寺に語りて潛に其の書を取り出だして見せ、我れをば常に麁忽者と戒め候ふが、此の度も又しかなりといへば、傳法寺是れは既に聞き屆けられたるなりと悅び、かくと友房に告げて、是れより心置なく中津川へ出づべきにぞ定りける。三宅又迎にゆけば、友房三百人許にて山中を打ち立ちけり。三の丸の大手にて人を留め次第に減じけり。本丸の書院にて對面あり。吸物を出して酌は小川傳右衛門なり。野村太郎兵衛肴をはさむを相圖に、傳右衛門一の太刀太郎兵衛二の太刀と定めたり。長政盃をさしける時野村肴を持ちて出でけるが、持ちたる盃を友房に投げ付け飛びかゝり肩間を切る。小川おくれたりと脇指を抽いて切り付くれば、さばかり逞しき友房即ち討たれけり。供の者をば所々に手當して、物具したる者共鎗ずくめにして殺しぬ。岐非谷へ軍兵を指し向けて打ち滅ぼされけり。小川・野村一二の定め有りしに違ひたりしかば、小川怒つて其の夜野村にいひけるは、岐非谷を吾れ初太刀たるべきに先を越され面

目を失へり。いかにと問ふ。野村打ち笑ひ、左思はるゝは理なり、能く聞かれ候へ。年をいへば吾れは弟なり。汝功名は四度に及び我れは唯二度なり。是れほど劣りたるものの、そなたに先をさせて我れ後れなば、是れこそ面目を失ふといふべけれ。栗山か又我が兄の多兵衛とならば前後をあらそはなん事似合ひたるべし。かく劣りたる我れに爭はんはおとなげなし。只免され候へといひければ、小川素より心易き事なり。但し心安くも切れたり。尤もとていよいよ親しみければ、人々野村が理も聞き事なり、小川もよく聽き入れたりとぞ感じける。

一九一　豐臣關白北條征伐出陣の事　附本多重次放言の事

秀吉北條を討たるゝ時、諸將浮島が原に並み居て秀吉をまつ。秀吉糸緋威の物具着て唐冠の兜黄金をちりばめたる太刀佩きて、土俵の大なる羽壺に征矢一筋指し、仙石權兵衛が參らせし朱の滋籐の弓持ちて、七寸ありける馬に金の瓔珞の馬甲かけ、靜に歩ませて打ち通られけるが、東照宮信雄と共に出で迎へ給ふを見て馬より下り、いかに貳心有りと聞きたり、いざ一太刀參らんと太刀の柄に手を懸けらる。東照宮左右の人に向はせ給ひ、軍始に太刀に手を懸けられ門出の目出たく候ふと高らかに仰

有りければ、秀吉何ともいはずして又馬に打ち乘り通られけり。

〔秀吉此の出陣の時、濱松の城に宿せらる。本多作左衛門折節御使に參りて歸りけるが、旅裝の儘にて諸將の中に進み出で、東照宮を見かけ奉りて、いかに殿はいつよりかく愚になり給へるや、國を持つ人の城を人にかす事や候ふ。さらば女房をも人にかし給はんかと罵りける。東照宮彼れは本多作左衛門と申す剛の者にて候ふが、家久しく昵くて只今のやうなる事を申すにて候ふ、無禮の詞を申し候ふと仰有りければ、人々承り偖ては承り及びたる本多殿にて候ひけるよ。かゝる事申す人多く有るべきかと賞しあへり。作左衛門物あらき人なりけるに、三奉行の中に命ぜられ政を執りしに、甚だ仁愛の事のみにて獄訟を斷るに、理正しく、四民昵き服しけり。東照宮の神慮淺からぬ御事なり。〕

一九二　井伊直政關白を討たんと言はれし事

東照宮小田原に向はせ給ふ時、先陣は榊原康政と命ぜられ、井伊直政御旗本と定めたまふ。直政行も先陣を好まれしに、此の時は少しも辭退の氣色なかりしに、小田原にて秀吉かたへの人僅に引き具

せられしを見て、唯今取り圍みて討ち取るべき時に候ふと進め申ししを、東照宮聞し召し入れられざりしかば、さらば先陣たらんといはれきとぞ。

一九三　鳥井源八郎先登士志を論ずる事

山中の城を責むる時、木村常陸介師春が士鳥井源八郎先がけして城に付き名乗りけり。羽柴藤五郎秀一が士磯野平三郎續き來り、汝は首取源八と世にいはれたる譽の士なれども、田舍そだちなる故武功を辨へず。斯かる場にては人はあきれ氣後れする物なる故、爰にて名乗れば、是れに心付きて我れ先にと進むゆゑ、思ふまゝなる獨功名もならず、物の譯もしらず、名乗るまじき處にて名乗るなりと笑ひければ、鳥井聞きて平三郎は志の士と聞きしに、眞の士志をばしらざるよ。人のあきれたる時は尙ほ高聲に名乗りて、人に心を付け力を添へて多くの人を用に立つるこそ武士の義なれ。獨り高名をせんとするは小事なり。いふに足らずと答へしかば、平三郎言ふ事なかりけり。

一九四　南部越後攻口の事

小田原を圍む時、國淸公の攻口は搦手の山の上なり。目の下に見おろし鐵砲を打ち入れけるに、城中よりあげ矢にうつ鐵砲烈しく、士卒進み兼れたる時、南部越後銃口を空に向けて打たせたり。其の玉雨の降るが如くなりしかば、城中ひるむ所を見濟まし、鐵砲を山ばなにならべ、透間なく打たせて攻め破りけり。

一九五　上樣日和といふ事

同じ時九鬼大隅守嘉隆日本丸といふ大船を乘り廻はし、南の海上を取り卷きけり。此所はあら海にて、東風吹く時は波浪山嶽を倒しかくるが如し。船をかけ並ぶる事思ひもよらぬ所なるに、秀吉城を圍まれし間五十餘日風靜に波穩かなり。是れよりして小田原海邊風なき日を上樣日和といひならはしけり。

一九六　伊奈熊藏兵粮を司る事

同じ時東照宮伊奈熊藏を召して仰せ出さるゝ事ども有り。其の時伊奈[illegible]より兵粮の用意して沼津

に運びたりき。然るに此の筥根山中に穀物の價、江尻・沼津と相同じ。遙に運漕せんより爰にて求むる事然るべし。心得がたき事なりと申しけるを、東照宮聞し召し、夫れは長束大藏大輔が謀なり。長束は武功勝れたるにもあらざれども、斯かる謀は長じたる者なれば、秀吉城主として寵せらるゝぞかし、汝が職にては兵粮運漕の事よく心得べきに、心得がたしといふは吾れも心得がたしと仰せ有りければ、伊奈汗を流して退出しけり。

一九七　蒲生氏郷の陣夜討の事　附氏郷金の三階菅笠の馬印を免されし事

同じ時蒲生氏郷金の三蓋菅笠の馬印ゆるされ候へと申されしに、秀吉夫れは聞ゆる佐々成政が馬印にてたやすくは免しがたし。今度小田原の武功によりて望む所にまかせん物をといはれしかば、氏郷今度の軍に人の目を驚かすか、さらずば討死とおもひ定め、繪像をかゝせて日野の菩提寺に籠め打ち立たれける。斯くて五月三日の夜かき曇りけるに紛れ、城中北條十郎氏房が持口より夜討をしたりけ

り。氏郷も今夜は夜討入るべきよ懈るなと下知せられしに、果して廣澤兵庫秀信（一作助重）大將にて押し寄せたり。氏郷の物見の兵町野萬右衛門に行き逢ひぬ。弓取り直し指し詰め引き詰め射けれども叫はずして引き返せば、敵進み來て柵の木を打ち破る。蒲生源左衛門郷成・田丸中務直政・町野右近幸知切つて出で、爰を專途と戰ひけり。氏郷銀の鯰の尾の兜の緒をしめ、

〔氏郷の許に新に仕ふる士に、吾が家にて銀の兜を著たる兵、度ごとに眞先に進み出でて働くなり。此の男にも劣らずふるまふべしと言はれけり。氏郷彼の兜著て毎も眞先かけられきとぞ。〕

兼れて一丈餘の鎗を設け置かれしを提げ、追つ立て追つ立て進まれけるに、廣澤兼れて鐵砲を後陣に並べ置きたれば、追ひ來る寄手を打ち立てけり。廣澤は聞ゆる剛の者なるが、鎗を横たへ片足を堀の中へ踏み入れ、大音上げて一鎗參らんと呼ばはるを、氏郷聞きて飛びかゝり突き合ひければ、蒲生左衛門郷可・同五郎兵衛郷治・佃又右衛門等かけ來りをめきさけんで攻め戰ふ。廣澤は今宵夜討の大將廣澤兵庫一番鎗と高らかに呼ばりけるを、氏郷目にかけて堀の中に飛び入りて擊ちとらんと、面もふらず兜の鍬を傾け、鎗を取り延べたゝき立てられしに、敵兵二人氏郷の鎗を取らんとする事七八度に及びしかば、氏郷廣澤をば討ちもらされけり。寄手餘りはげしく戰ひければ廣澤もかなはじとや思ひけ

ん、城をさして引き退く。氏郷いづくまでもと云ふまゝに先に進んで戰ひしかども、門を閉ぢて鐵砲を打ち出だせば、引き返されしに胄に矢二筋折りかけ、物具に鎗の疵透間なく、十文字の槍ささらの如くなりしかば、秀吉感狀にかの馬印免されけり。

一九八　武藏の國八王寺城落つる事

武州八王寺の城主北條陸奥守氏昭は小田原にありて家臣留守したりしに、前田利家・上杉景勝攻めむとて先に降參しける北條氏邦に使を城にやらせ、小田原既に破れぬ。とく城を渡し候へと言ひ送る。中山・近藤・狩野等從はず。氏昭降參せば證書を賜はりて城を出づべき旨下知すべし。然らずして降參せば士の瑕瑾なり。氏邦が如き臆病者は一人も城中に候はずと答へけり。利家・景勝も其の義に感ずといへども、扨て止もべからざれば、一萬五千の兵をもて圍まれけり。甘糟清長攻め入りて火をかくる。狩野一庵・近藤出羽助實・金子三郎右衛門家重、死狂ひに切つて出で討死す。横地監物は氏昭の第一の長臣なり。火もえ上れば今日を限りに散々に戰ひけるに、寄手討たるゝ者多し。中山勘解由家範は武勇の將、殊に八條修理滿朝が馭法を傳へ、關東無双と世に稱せらゝる人なり。大敵に少しもひるま

ず、二百許にて突いて出で爰を最期と切つて廻るに、寄手新手を入れ替へ攻めければ、僅十五六人に討ちなされけり。利家誰れか中山ゆかりあると問はるゝに、松山の降人根岸主計定直が妻は中山が妻と兄弟なり、小岩井雅樂助は中山が馭法の弟子なるよしを申す。利家疾く中山に味方に屈せよといふべしとて、兩人を城中へ入れられしに、中山既に自害して其の妻も自害したるが、まだ息かゝりて有りければ、詞をかはして馳せ歸り、斯くといへば利家大に惜しまれけり。監物はがりぬけて逃げ出でけり。北條家關東の城々多しといへども、豆州韮山の城の外は多く降參しけるに、八王寺の兵城を枕に戰死せし事を、東照宮聞し召し其の義を感じ思し召され、中山が嫡子助六郎昭守、二男左介信吉に祿賜はり、昭守が子信守大坂の軍に功有り、信吉は後水戸中納言に仕へて備前守と稱す。狩野一庵が子主膳も仕へ奉りけり。

一九九　大音藤藏雨森彥三郎功名の事

八王寺の城攻に城兵切つて出で死狂ひする時、利家の小姓大音藤藏一番首を取りたる處に、雨森彥三郎續きて利家の前に至りて、實檢に備ふ。一番は大音なりと申して、二番首の帳に記させたるを利

家大に感ぜらる。其の頃大音は利家の勘氣を蒙り居たる故、數度高壁に姓名を名乘りしかば、諸人一番乘といふ事を知りてけり。

二〇〇　信雄卿那須に謫せらるゝ事

北條亡びて後、秀吉石垣山の本陣に諸將を集めて酒宴に及ぶ時、信雄は舞の上手と咱き、わはれ一曲觀まうし度しと秀吉いはれしに、信雄吾れを侮るとくち惜しくや有りけん、不吉の詞を舞はれたれば、秀吉かゝる悅の中に忌々しき事ども心得ずとて那須に追ひやられけり。此の時までも千餘騎の士を具せられしが、僅に打ち連れて那須に赴かれぬ。時を計らず勢を知らず、無益の空言に國を失はれし事のうたてさよと人みないひあへり。

二〇一　坂部岡江雪免さるゝ事

北條滅亡の後、秀吉坂部岡江雪齋に汝先年北條の使として上京し、約せし所忽ち背きて名胡桃の城を取る事、氏直の姦計にや又汝が詐なるかと責め問はるゝに、直に申さんと答へしかば秀吉大に怒り、

手枷足枷を並べ、江雪を呼び出だし、刀を奪ひ取り左右の手を引つ張り庭上に引き居ゑて後、秀吉罵つて曰く汝が約せし處に背くこと誠に憎むに餘り有り。且つ日本國の兵を動かし主君の國を滅ぼしし事、汝に於て快きやと譴めらるゝに江雪色も變ぜず、氏直更に約に背くの心なく候。邊鄙の士愚にて名胡桃を取り、終に弓箭に及びて北條の家亡びぬる事、江雪が思慮いかんともすべき樣の候はず。誠に家の亡ぶべき運命にや候はん、されども日本國の兵を引き受くること北條家の面目なり。此の外申すべき事なし。疾く首を刎れられ候へといふ。秀吉顏色打ちとけて、汝は京に引き上せ磔に懸けんと思ひしに、大言を吐きて主君を辱しめず、大丈夫といふべし。命を助けん吾れに仕へよとて許されけり。坂部岡を改めて岡と稱しけるは此の時よりの事なり。

二〇二　關白鶴ヶ岡參詣の事

秀吉鎌倉の鶴ヶ岡に詣でて、八幡宮の戸を開かせ、頼朝の像を見られしが、背中を打ち叩き、微賤より出てで日本を掌に握る事我れと御邊と二人なり。然れども頼義父子鎭守府將軍として、東國の者ども久しく親しみ多かりき。經が小島より兵を起されしに、關東の靡き從へるも謂れなきに非ず。我

れは主民の中より斯く日本を思ひの儘にすれば、功尚高しといはれけり。

二〇三　關白宇都宮にて佐野天德寺と物語の事

秀吉陸奥に赴く時、宇都宮にて佐野天德寺を呼び、

「野州佐野辛澤山の城主佐野小太郎藤原宗綱、天正十三年討死して子なし。家臣連判の起請文を小田原に送り、氏政の弟氏忠をもて家を繼ぐ。宗綱が伯父天德寺了伯は佐竹の一族の中を乞ひて、佐野の家を嗣がんとすれども是れを用ゐず。了伯は夫れより京都に赴き、黑谷に閑居せしを、秀吉北條を伐たるゝ時、鄕導とせられしなり。」

物語させて聞かれしに、武田・上杉の弓箭盛なりし事を申しければ、秀吉冷笑ひ、いかに天德寺、謙信・信玄といふ坊主も疾く死にたるこそ幸なれ。今にながらへ居ば、一人には薙刀をかたげさせ、一人には吾が奥の先なる朱傘を持たせて、馬の前に召し具すべきに、此の世になければ力なし。何條車がかり、坐備みなたはことなりとぞいはれける。

二〇四　蒲生氏鄕大志の事

秀吉陸奥に赴き、蒲生氏鄕に八十萬石の地を賜はりけり。氏鄕退出し柱に倚りかゝりて涙ぐみけるを、山崎の某居寄りて辱く思はれん事尤もなりといひしに、氏鄕私語きて吾れ都近き所にて小き國一つ賜はらば、終に天下に旗を揚げなんに、邊鄙に棄てられたれば何事か仕出だすべき、志の空しく成りたるによりて、おほえず涙の流るるよとぞ語られける。

二〇五　奥州葛西大崎一揆の事

天正十八年奥州葛西・大崎一揆の時氏鄕名生の城にあり。會津に飛脚をもて鐵砲の玉藥を人に見とがめられざるやうを計りて運び來れと下知せられしかば、山伏をかたらひ、笈の中に玉藥を入れて、頭巾螺貝杖を携へて、湯殿山に詣づるありさまして送りけり。是れ蒲生左文が謀なり。

二〇六　蒲生家の士大將軍兵調練の事

蒲生氏郷・笠井・大崎にての軍に、佐久間備前・同内膳兄弟を先陣とせらるゝに、下知する事氏郷の心に叶はず。此の兄弟は元秀吉に關せしが、秀吉より氏郷に賜はりたる侍大將なり。氏郷明日の軍は神田修理・外池信濃・岡野左内・蒲生源右衛門等先陣せよ、佐久間兄弟は見物せよとぞ下知せられける。先陣の士大將六人相集り、佐久間兄弟の軍立あしきとて斯く仰せ承りぬ。おのおの討死したりとも、已が躬を捨てて只汚名を出さゞるまでの事にて、斯く仰を承りたるかひもなくては、御大將の恥辱なり。然らば進退の節内ならしせずば叶ふまじとて、先陣の軍兵を打ち具し平野に押し出だしかけ引のなら し五度に及びけれども尚調はず。六人そこにて明日の軍は殊に大事なる故、かやうに馴らしに及びぬるよ。人々の進退以の外調はず。いかにも能く心得候へと再三詳に申し聞かせさて、采配を取り下知するに、進退節にあたりしかば、さらば明日の軍はおもふ儘なるべしと悦びいさみて、果して敵を切りなびけ大勝を得たり。淺野長政秀吉の命にて陸奥國に在りしかば、其の軍の有樣駈引の圖に當りたる、終に見聞に及ばざる所なりと褒められたりとなり。氏郷も大方ならず悦びて、七人に感狀を與へていろいろの物添へて賞美ありけり。

二〇七　氏郷伊達家の刺客を免されし事

伊達政宗蒲生氏郷の威に壓さるゝ事を心中に深く憤りて、氏郷を殺すべき事を思案して、敷代家に仕へし者の子に、清十郎といへる十六歳に成りける者、容貌勝れて艷なりしに、密にたくめる事を語り聞かせ、田丸中務少輔が兒小姓に出だして奉公させられけり。田丸は氏郷と姻家の親しみあれば、來られん時、便を伺ひて刺し殺せとの事なり。清十郎が父の方へ遣はしける書を、關所にて改め見しより事起りて、其の謀の泄れたりしかば、清十郎を獄に押し入れ、此の事を秀吉に告ぐるといへども、秀吉遠く慮りて強ひて伊達家と和平せさせられぬ。氏郷清十郎を呼び出だし吾れ過つて罪なき義士を獄に入れ辱を與へたるよ。其の君の爲に命を捨てて忠をいたす賞するに餘りあり。とくとく伊達家に歸るべしと禮義正しくもてなして歸されけり。

〔記せし書に清十郎が姓をもらしぬ。をしき事なり。〕

二〇八　氏郷佐々木が鐙を細川忠興に贈らるゝ事

附　黑塚の歌の事

氏郷の許に佐々木が鐙といへる名高き器あり。細川忠興いと懇に我れに賜はれと乞はれしかば、亘理某是れは世久しく傳はる物にて候ふ。似たる鐙を賜り給へといひければ、氏郷

なき名ぞと人にはいひてやみなまし心のとはゞいかが答へん

といふ歌の恥かしきよとてかの鐙を贈られけり。

〔蒲生はもと江州の士にて佐々木の臣なり。氏郷伊勢松坂十二萬石なりしが、後會津を賜はりける時は四十歳の頃なり。佐々木承禎が子四郎、太閤の時僅二百石與へ、太閤の咄の席に呼び出だされしが、伏見にて太閤の前より退出する時、氏郷昔の故に四郎が刀を以て從はれきとなり。又安立郡に川あり。向ふに黒塚あり。安立は氏郷の領地なりしに、黒塚は伊達政宗の領地なりとて爭の有りしに、氏郷平道盛の歌に

みちのくの安立が原の黒塚におにこもれりといふはまことか

と讃める事あり、いかにと申されしに、聞く人黒塚は安立が原に屬したる事、分明なりとて政宗爭をやめてけり。〕

二〇九　土岐頼定武勇の事

本多中務大輔忠勝に上總の小瀧十萬石を賜はりしかば、小瀧に赴き土岐彈正少弼頼定入道慶岸の士どもを呼び出だして祿與へたり、彈正は同國萬喜の城に居し故、世には萬喜少弼と稱して武勇の譽ありし人なれば、此れを問ふに、舊臣申すは、萬喜常に房州の里見義高と弓箭を取り候ふが、敵を怠らせんために、舞臺を設け踊りをさせ、城門を明けかふるとて果さず、船著のけはしきを平し候ふ、里見が將正木大膳時綱寄せ來り船より上る時、慶岸城にかざりたる紙旗を絹の旗に立て換ふるとひさしく、古き門より不意に打つて出で、忽ち切り崩したり。是れより土岐が地に攻め入る事候はずと語りければ、忠勝聞きて土岐は甲越の兩雄將にも劣らぬ人なりと稱し、其の後舊臣に其の家の事を問ふ時は、必ず萬喜殿とぞいはれける。

二一〇　東照宮武田北條の跡御制度の事

勝頼亡びて後、東照宮甲斐を治め給ふに、法度は信玄より用ゐる處を改め易ふる事なかれ。年貢は

少く納めんと仰せ出だされしかば、百姓大に悦びあへり。小田原亡して後其の地を治め給ふも又同じ。諸民大に悦び、數百年の恩義相結べるに同じかりき。

二一一　東照宮武田の舊臣を召して御物語の事

同じ頃、東照宮武田家の士横田甚右衞門等を召して、信玄の事ども物がたりさせて聞し召さるゝ時、御坊の時火繩はいかゞしたると御尋あり。柿の澁に石灰を入れて火繩を染め候へば、年經ても用ゐられ候ふと申す。横田又は城意庵などに、信玄の事をば御坊と仰せ有りけるとぞ。又武田家にて鏃をゆるくつめ候ふは敵の肉の中に鏃の殘らん爲なりと申すを聞し召し、士の軍に臨むはみな其の君の爲ぞかし。射伏せたれば吾が軍の利となるべし。後まで人を苦しむるは不仁の業にこそあれ。今日より我が家の士は鏃を堅く詰めよと仰せ出だされけり。

二一二　東照宮物具の御物語 附小野木笠の事

東照宮仰に物具の美麗なるは無益の事なり。又重くするも益なし。井伊兵部は力も有りて重き物具しつれども、度々手負ひしなり。本多中務はさもなくて、薄手負ひたる事もなし。只戰ひ易からん樣を心懸くべきなり。下部は薄き鐵の笠を著せたるぞよき。急なる時は飯をも炊ぐべしとぞ。

〔鐵の笠は甲州にても下部は著たりきとかや。畿内の方にはなかりしに、丹州亀山の小野木縫殿助足輕已下の者に鐵の笠を著せける故に、其の頃は小野木笠といひけるとなり。〕

二一三　秤御定の事 附一歩金辨當挾箱始りの事

東照宮關東御打入の後、甲州に在りける秤を遣る、守隨兵三郎といふ者井伊直政に申して、關東黃金白銀等を商賣するに定りたる秤を用ゐられん事を願ひければ、それより今の制は定めさせ給ひけり。

〔京に後藤徳乘といふ彫刻師あり。東照宮關東御打入の後徳乘が弟子を召しけるに、遠國を嫌ひしに、後藤庄三郎、われ行かんとて關東に至り、寵せられしかば、後天下を知し召さば願の一ッ叶へ給へと申す。何事ぞ易き事よと仰有り。さらば黃金を四ッに切りて通用せばやと望みけり。果して海内東照宮に歸しければ、庄三郎が志の如く仰せ出されけるより、今の壹歩金といふは始まれり。但し甲州には信玄の時碁石金といふ物あり。されば夫れより前には碁石金の外にはなかり

しにや。一歩金は碁石金に倣ひたるにやあるべき。又信長の時今の辨當といふものは安土より始まれり。其のはじめは小芋ほどの中に、爭て色々の物入れられんとて人信ぜざりきといへり。挾箱も同じ頃造り始めたりといふ。又大坂の津田長門守始めて造り出だすともいへり。

二一四　酒井金三郎本を忘れざる事

原吉丸・酒井金三郎、共に東照宮の近習に仕へ申しけり。伏見にて御庭に出でさせ給ふ時、原御太刀を持ちて庭におり、草履はくに遑なく跣にて蒔石の上に在りけるに、酒井草履をあたへければ人々譏ると聞し召し、仔細を御尋あり。酒井承り原は元下總の笛井の城主原一部が子にて候ふ。臣が先祖原に仕へきと承りぬ。昔の主君のゆかり跣にて炎天に居たるを見るに堪へかれ候ふと申しければ、本を忘れざるの士なり。吾が子孫にも如レ斯あるべしと大に御感あり。

二一五　成瀨正成忠信の事

秀吉大坂にて馬揃の時、千貫矢倉に上り覩られしに、馬の太くたくましきに乘りて、紅の沓を後輪

に付けたる者あり。何者ぞと問はるゝに德川家の士成瀨小吉なりと申す。祿はいかにと問はるゝに、東照宮二千石與へ置きたりと仰せられしに、秀吉あはれ吾れに奉公せば五萬石與ふべきといはれしに其の後東照宮成瀨を召してしかじかの事ありき。秀吉に仕へなんやと仰有りければ、成瀨承りこは御情なき事に候ふと申す。いやとよ汝秀吉に奉公せば我が爲にもよかりなんと仰せられしに、成瀨涙を流し不肖の身祿を貪りて主君を捨て奉らん者と思し召しけるを知らざりけるも愚に候ふ。只疾く自害して心をあかさん物をと申しければ、其のよしを秀吉に御物語有りけり。後に東照宮長臣あまた召され、古に聞きし三尺の孤を託すべきといひし人は成瀨にてこそあれと仰せられけり。小吉正成後年人正といひしなり。

二一六　東照宮相摸境御打廻りの事

北條家亡びて後、東照宮甲斐・相摸の堺三增嶺御打ち廻りの時、過ぎし永祿年中の戰場を御覽あり。はげ山なりし故信玄兵を押し通し、たやすく軍に勝ちしなり。北條家武略に拙くて山林を伐りあらしたる故ぞかし。生ひ茂りたらんにいかで信玄陣をしくべき。山を林にせよと仰せ出だされけり。

二一七　豐臣關白五腰の刀の主を察せられし事

秀吉伏見にてある日廣間に出でられしに、五腰の刀を見て試に其の名をいはんとてさゝれしに、違はざりければ、前田玄以誠に神智のおはし候ふよと驚きたりければ、秀吉笑つて何の仔細もなきぞとよ。秀家は美麗を好むが故に黄金をちりばめたる刀是れなるべし。景勝は父の時より長劍を好めり。寸の延びたる刀を是れにあてたりき。利家は又左衛門と云ひし時より、先陣後殿の武功により、今大國を領すれども昔を忘れず。革巻きたる柄の刀是れ他の主に非ずと思へり。輝元は異風を好む。異なる體にかざりなせる刀是れならん。江戸大納言は大勇にして一劍を頼むの心なし。取り繕ひたる事もなく、又美麗もなき刀其の志に叶ひたり。此れを以て察しけるに違はざりけりと言はれけり。江戸大納言とは東照宮の御事なり。

二一八　竹俣兼光の刀の事

謙信の許に赤小豆粥・竹俣兼光・谷切とて三の刀あり。竹俣兼光はもと越後の百姓持ちたりしに、ある時山中を通りしに、雷烈しく鳴りたりしかば、あはや落ちかゝるかと思ひて、刀を抽き頭に指し當てて目をふさぎ居たり。やゝ有りて空晴れしに、刀の鋒より血流れ殷にそみたり。又或る時大豆を袋に入れて歩るさに袋の綻びより一粒づゝこぼれけるが、鞘にあたりて二ツに成りしかば、怪しみ見しに鞘のわれて刃は纔に出でたりしに當りし故なり。双なき刀とて竹俣三河守乞ひ得しが、謙信後にさされけり。弘治年中川中島合戰に信玄の兵輪形月平大夫といふ者鐵砲をもてねらひしを、謙信馬を乘り寄せ一刀に切り伏せてかけ通られけり。後に甲斐の兵ども是れを見るに、輪形月は物具かけて切られ、持ちたる一兩筒は二の見通の上より切り放したり。いかなる刀にてかくは切られしといひあへるに、則ちかの兼光の刀なりけり。景勝の時京にて研がせしを越後にて人々に見せて、京の水にて研ぎたれば刃の光殊更勝れしと悦ばれしに、三河守熟々と見て、此は贋物にて候ふ。子細は此の刀はばきより上一寸背に馬の毛の通るべき許の穴の候ふ。是れを知る人外にはなしと申す。さらばとて竹俣を京にやりてさがし求むるに、眞の兼光の刀を清水の南坂より取り出だす。かくと石田三成に告げて、贋物したる者十三人日の岡にて死刑せられけり。竹俣越後に持ち歸りて、かの穴に馬の毛を通して景勝に見せけり。其の後此の刀太閤に奉る。秀頼亡びて落武者取つて和泉・河内の方へ行きたりと聞え

しかば、此の刀を獻ずる者には、黄金三百枚賜はるべきよし仰せ出だされしかども、其の行方終に知る人なしとぞ。

二一九　本庄正宗の刀の事

本庄越前守繁長は越後の勇將なり。後景勝上杉十郎憲景が祿を本庄に與へらる。本庄出羽の庄内大寶寺義興と戰ひ勝つて、二男千勝丸に庄内を與へけり。本庄最上義光と出羽の千安が表にて軍しける時、最上の軍敗北せしに、義光の士大將東漸寺右馬頭口惜しき事に思ひ取つて返し、首一つ提げて越後の兵に紛れ、繁長を目にかけて只今敵の大將を討ちて候ふ。實檢に入れ參らんと言ひて馬に鐙を合はせかけ寄せて、正宗の刀を以て兜を打つ。明珍の兜なりしかば筋四ッ切り削りたり。繁長右馬頭を切つて落し、首に添へて景勝に出だしたり。刀をば本庄に返し與へられしが、後故有りて東照宮の御刀となり、本庄正宗といへるは此の刀なり。

二二〇　冑の名樣々有りし事

加藤嘉明の兜は形を富士山に造りなして、名をも則ち富士山といふ。具足の胸に天人の雲に乘りたるを蒔繪にしたり。竹中重治が兜は一の谷、明智秀俊が兜は二の谷といふ。攝州一の谷二の谷相並べり。又柴田伊賀守勝豐が兜は鐵蓋が峰といふ。是れは一の谷より高く峙ちたる山なれば斯く名付けしとかや。此の餘浦野若狹守が小水牛、黑田長政の大水牛、日野根が唐冠の兜、原隱岐守が十王頭、福島正則の四また鹿の角、本多忠勝の佐藤四郎が兜、蒲生氏郷の銀の鯰尾、伏木久内がわり蛤、武田信玄の諏訪法性、秀吉の八日の月、加藤清正の長烏帽子、矢田作十郎が鯉の兜、藤堂新七が帽子などいへる多し。細川忠興の山鳥の尾の兜といへるも名高し。關ヶ原の軍に忠興かの山鳥の尾の兜を着、銀の天衝の指物なりしに、遙に見て唯鮮鶴のやうに有りけるを、東照宮兜と指物と映りあひて面白しとて乞ひ得させ給ひ、台德院殿に參らせける。

二二一　伊藤七藏功名の事

信長江州小谷の城攻に伊藤七藏先がけしたるに、從者取り付きたる故、上帶きれて刀も脇差も塀下に落つ。七藏少しもひるまず乘り込んで、柵の木取つて敵三人たゝき伏せ功名しけり。七藏父を若狹

といふ。相州の人にて武者修行し、尾州前田村に居ける頃、信長呼び出だされけり。七藏尾州三本木の軍に事急にして、編笠をかぶりながら一番鎗を合はせける故、信長大に賞美して編笠と呼ばれけり。後秀吉に仕へて度々功名有りしかば、紫紬非筒の紋・廣袖の小袖を與へられければ、鎧の上に著たり。秀吉の旗奉行と成りたり。

二三三　井伊直孝用意の事

井伊直孝のいはく、人毎に具足櫃を持たせて、早く取り出だす志を用意する者あり。取り出だす間も遲きほどの事あらば、何時も素肌にてかけ付けてこそよけれ。具足を著たると著ざるとの差別なき事なりと申されけり。

新訂 常山紀談 上卷終

明治四十四年八月廿五日印刷
明治四十四年九月一日發行

學生文庫第十編

常山紀談上
定價金三十錢

校訂者　大町桂月
東京市日本橋區本石町三丁目十四番地
發行者　加島虎吉
東京市京橋區日吉町十番地
印刷者　波邊爲藏

印刷所　民友社

不許複製

發兌
東京市日本橋區本石町三丁目　電話本局三六六番二一六七番　振替貯金口座東京一七四四番　至誠堂書店
東京市日本橋區住吉町二番地　電話浪花五八四九番　振替口座東京一九八四二番　至誠堂小賣部

新譯漢文叢書第一編　大町桂月先生譯評　（廿二版）

○新譯　日本外史

袖珍天金箱入特製　特價金壹圓貳拾錢
紙數　壹千貳百頁　小包料金八錢

本書は近世の偉人絶代の文豪頼山陽が一生の心血の凝る所識見卓拔筆力雄麗古英雄一々紙表に生動し干戈の聲恍として机上に起る成敗の跡火を見るが如く大義爲めに明らかに天下の士氣爲めに振ふ實に東西無類の散文敍事詩なり現代の文豪大町桂月先生拮据三年之を今の文に移し文部省所定の假名遣に依り小學兒童にも容易に讀むを得せしむ嗚呼外史は斯くて永遠に復活すべし難解の字には解釋を附し治亂興亡の因る所を尋ねて奇拔痛快の批評を加ふること數百條山陽が當時を憚りて言ひ得ざりしことまでも遺憾なく顯はされて桂月先生獨得の妙を極む觀殊に奇一讀人をして血躍り腕鳴らしむ以て歷史を知るべく以て士氣を勵ますべく以て文學を味ふべし天下有爲の士此書を閑却して自ら寶を捨つる勿れ

新譯漢文叢書第二編　友田宜剛先生評解　（五版）

○新譯評解　文章軌範

袖珍天金箱入特製　正價金壹圓拾錢
紙數　壹千壹百頁　小包料金八錢

◉東京朝日新聞評、文章軌範を普通の日本文に譯し（本文悉くゴジック五號活字を用ふ）更に平易の口語文に通解し別に又語釋を施し文の構造法を說明し上欄に原漢文を掲げたり文章軌範評解の書として最も初學者の通じ易きものにして從來漢文の研究書たりし文章軌範は明治の日本文を習ふものゝ研究書となれり著者は文章教授上に一見地を具せる人斯人にして斯書あるは世人の期待に負かずと云ふ可し

大町桂月先生校訂解題

學生文庫

袖珍總ロクロース　全部壹百冊　郵稅各四錢
特製美本　紙數　郵稅各四錢
舶來上等紙刷　定價各冊金參拾錢

發刊主旨

古典的智識は人の學德智能を深奥ならしむるのみあれど古典亦自らあり近時古書の大刻あれど密學生の必ず擇ぶべき尤も趣味深き校訂を哲學の精確を期せんとす桂月先生の續出す深く慨す此の一冊の價値は一時の流行に眩惑せざる所以なり先生の周到なる解題は鮮明にして今日の嚴正なる批評は眞に學生の必讀すべき名著なり

既刊書目

1 南朝史傳 全	2 日本外史 上	3 益軒十訓 上	4 謠曲全集 上	5 曾我物語 全	6 西遊記 上	7 源平盛衰記 一	8 太平記 一	9 心學道話 全	10 常山紀談 上
11 日本外史 中	12 益軒十訓 中	13 先哲叢談 全	近刊	平家物語 上	源平盛衰記 二	狂言記 全	義經記 全	大岡政談 全	一休諸國物語 全

以下續々着手中

發兌　東京市東本石町　至誠堂　振替口座東京四四七一

新譯漢文叢書第三編　濱野知三郎先生評解　（三版）

○新譯 孟子　（附索引）

袖珍天金箱入特製　正價金九拾錢
紙數八百頁　郵稅金八錢

◎讀賣新聞評、孟子の全文を和譯して之に註解を附し上欄には五十音に基く索引を添へ書中の一語を知るときは直に其全文を求め得るの便に供したり……其和譯の正當なる註釋の穩健にして平易なる世に貢獻する所少なからざるべく殊に孟子の書は其議論の奇拔なる其文章の雄健簡潔なる支那文學中推して第一位に置くべきもの青年子弟の讀物として最も現代に適切のもの……此國民修養の一大格言集より隨意に欲する處の語句を索出し得るは何よりも愉快とせざるを得ず

新譯漢文叢書第四編　大町桂月先生譯評　（再版）

○新譯 日本樂府

袖珍天金箱入特製　正價金五拾錢
紙數三百五十頁　郵稅金六錢

當代に異彩を放てる大町桂月先生擱きに日本外史を譯せられ今又頼山陽の咏史日本樂府を譯するのみならず之を釋し之を評せらる徹底の見老熟の筆明快を極めて渾然として桂月一流の名文となり朗朗誦すべく尊王の詩人又愛國の詩人として古今に獨歩せる頼翁の氣魄と筆致とを躍動せしむ以て日本歴史を知るべく以て士氣を鼓舞すべし日本男兒之を讀まば必ず案を拍つて起たん

新譯漢文叢書第五編　大町桂月先生譯評　（再版）

○新譯 日本政記

袖珍天金箱入特製　正價金八十錢
紙數六百廿餘頁　郵稅金八錢

頼山陽前に日本外史を著して武門の興廢を説き、後に日本政記を著はして朝廷施政の大綱を明せり。先頃喧騒を極めたる南北朝問題の如きも、翁が八十年前政記に於て既に解決したる所にして、兼ねて維新の一大原動力となりたる所なり。翁が尊王愛國の精神の形見なり。殊に政記は翁が死に至る迄も手刪して止まざりしものにして、實に史界の一大偉觀たり。然るに從來世に行はれたる政記の板本は校訂粗漏にして誤謬甚だ多し。大町桂月先生茲に之を飜譯せられ、一々精密に誤謬を正し、難解の語に解釋を施し振假名を付し、先生獨得の痛快なる警評を隨所に加へて筆力縱横、熱血筆端に迸り、翁と先生との氣骨相俟つて紙上に活躍し、錦上更に花を添ふるの觀あり。日本政記の面目茲に一新す。日本國民必ず一本を備へざるべからず

新譯漢文叢書第六編　久保天隨先生譯評　（三版）

○新譯 十八史略

袖珍天金箱入特製　正價金八十錢
紙數七百頁　郵稅金八錢

上下五千年、興亡八十餘朝、支那歴史の殆んど全體は、十八史略の一書に因りて、その大概を領知すべし。加ふるに、この書は、譯者が特に意を用ゐしものにして、妥當穩健、復た一字一句も苟くせず。卷中に挿入せし數百條の評語は奇警峭拔、その史實と相待つて覺えず、案を拍つて快哉を呼ばしむ、加之、篇首には、精細なる解題を載せ、卷末には便利なる新式の索引を添ふ

新譯漢文叢書第七編　友田宜剛先生評解　全七冊縮刷全壹冊

○新譯評解　續文章軌範

袖珍天金總クロース特製紙數壹千頁　正價金壹圓　郵稅金八錢

續文章軌範は正文章軌範と並んで作文書の雙璧、古人が心血を濺ぎたる千古の名文陸離として光彩を放ち文に志す者は必ず之を坐右に致して日夕に師とし友とすべし本書は作文教授の泰斗友田先生が刻苦研鑽多年の螢雪を積んで之を完全なる明治の作文模範化せられたるもの其異彩特長正篇と相同じく作者略傳、解題、大意、語釋文法、通解、總評、新式活字ゴシックの譯文、上欄の原文何れも燦然として光を發ち、正續彼此相待つて日月を並べ懸けたるが如し冀はくは江湖の諸彦一書を坐右に備へよ

新譯漢文叢書第八編　大町桂月先生譯評　全五冊縮刷全壹冊

○新譯　國史略

袖珍天金總クロース特製　目下印刷中

萬世一系の天皇を戴ける神州に生れながら神州の尊き所以を知らず三千年の金甌無闕の歷史の實質を知らず人心輕佻となり浮華となり尊王愛國の精神失せて士氣銷磨せんとするは今の世の大患なり世の歷史教科書は唯歷史の骨組のみありて肉なく血なし歷史教育の宜しきを得ざること其大原因なり桂月先生茲に慨する所あり先に日本外史日本政記日本樂府を譯されこと既に定評あり今又國史略を譯さんとす國史略は古來の諸國史の粹を拔き要を取り日本全史として最も國民的なる國史略を譯して篇を聚め第行幸に結びたるにて作者の精神を諒とするに足る二十年前迄は戶閉却されたるにも係らず漢學教育衰へし現今に際し此名著も空しく吾人の念頭より閉却されんとす時に當り現代の文豪大町桂月先生之を譯し之を解し更に適切なる批評を加へて有益なる貴重なる國史略茲に復活す

266
430

004553-001-1

特63-601

常山紀談

大町　桂月／校

上

M44-45

ACE-1149

266